熊本県文化財調査報告第238集

船入遺跡 II

一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

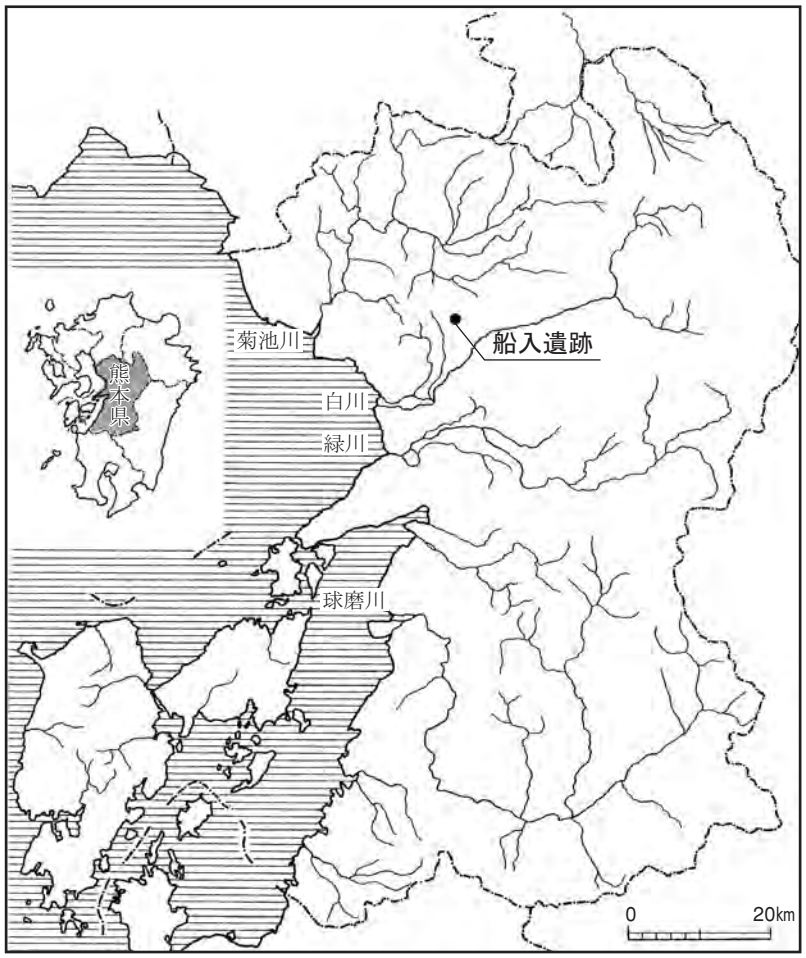
２００７．３

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第238集

船入遺跡Ⅱ

一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



２００７年３月

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の計画した一般国道３号熊本北バイパス改築事業にともない、菊池郡西合志町大字須屋（当時）に所在する船入遺跡の発掘調査を実施しました。

その調査成果のうち平成13年度調査分については平成14年度に『船入遺跡』として刊行しました。今回は平成17年度に実施した発掘調査の成果を本発掘調査報告書として刊行します。

平成13年度の調査では、隣接する中世の「須屋城跡」と関係すると考えられる建物跡や堀、道路状遺構などを確認できました。今回調査した部分でも前回の調査に関係すると考える堀跡などを確認しました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与できれば、喜びに堪えません。

最後になりましたが、旧西合志町を初め地元行政及び地元の方々、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所並びに工事関係者の方々にはお世話になりました。改めて謝辞を申しあげます。

平成１９年３月３１日

熊本県教育長　　柿　塚　純　男

例　　言

1　本書は熊本県教育委員会が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の委託を受けて実施した、熊本県菊池郡西合志町須屋字塔ノ木に所在する船入遺跡の調査Ⅲ区の調査報告書である。

2　平成17年６月から７月までの期間、熊本県教育庁文化課が発掘調査を実施した。

3　発掘調査にともなう遺構の実測の一部ならびに現地の写真撮影は、坂田和弘・濱田教靖が行った。地形測量・遺構実測は主に（株）九州文化財研究所に委託した。

4　調査区の４級基準点測量、メッシュ杭の設置作業は株式会社十八測量設計に委託した。

5　整理作業は平成18年４月から平成18年８月までの５ヶ月間、熊本県文化財資料室で実施した。

6　遺物の実測は坂田・赤星和美・島川千秋・山田友子が行った。

7　遺構、遺物の製図は戸田紀美子・清水千郷が行った。また写真図版掲載の遺物の写真撮影は坂田が行った。

凡　　例

1　全調査区位置関係図は2,500分の１とした。

2　現地での実測作業では遺構配置図を100分の１、現地での各遺構・土層の実測縮尺は20分の１で行った。本書への掲載縮尺は基本的に40分の１、20分の１で行い、図中に縮尺を示した。

3　出土遺構には現地で全ての遺構に「Ｓ−通し番号」として遺構番号をふったが、本書への掲載にあたって、平成15年度発刊の『船入遺跡』の記述と整合させるため、各遺構について種類ごとに前回調査の遺構番号に続けた番号をふった。遺物については本書のみで一連番号とした。遺物の掲載縮尺は３分の１、２分の１を基本とし、石器は３分の２、２分の１とした。それぞれ縮尺は図中にスケールによって表示した。

4　出土遺物の解説は本文中に記した。種別・形式・法量出土層位等については、挿図毎に表形式で掲載した。

本文目次

序　文

例　言

凡　例

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　一般国道３号熊本北バイパス改築事業と埋蔵文化財について…… 1

第２節　調査に至る経過…… 1

第３節　調査の組織…… 1

第４節　調査の方法と工程…… 4

第５節　整理作業・報告書作成の方法と工程…… 7

第Ⅱ章　調査Ⅲ区の調査成果

第１節　基本層序…… 9

第２節　遺構と遺物…… 9

第Ⅲ章　まとめ

第１節　調査Ⅲ区のまとめ……31

第２節　船入遺跡と須屋城跡……34

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　熊本北バイパス関連埋蔵文化財分布図…… 3
第２図　船入遺跡全体遺構図……5〜6
第３図　遺構配置図……10
第４図　Ⅲ−ａ区遺構配置図 ……11
第５図　Ⅲ−ａ区４号堀土層断面実測図（１） ……12
第６図　Ⅲ−ａ区４号堀土層断面実測図（２） ……13
第７図　Ⅲ−ａ区４号堀出土遺物実測図（１） ……14
第８図　Ⅲ−ａ区４号堀出土遺物実測図（２） ……15
第９図　Ⅲ−ａ区４号堀出土遺物実測図（３） ……16
第10図　Ⅲ−ａ区４号堀出土遺物実測図（４） ……17
第11図　Ⅲ−ｂ区遺構配置図 ……18
第12図　Ⅲ−ｂ区16号溝土層断面実測図 ……19
第13図　Ⅲ−ｂ区16号溝出土遺物実測図 ……20
第14図　Ⅲ−ａ区２号道路状遺構土層断面実測図 ……22
第15図　Ⅲ−ａ区２号道路状遺構出土遺物実測図（１） ……23
第16図　Ⅲ−ａ区２号道路状遺構出土遺物実測図（２） ……24
第17図　Ⅲ−ａ区22号溝土層断面実測図 ……25
第18図　Ⅲ−ａ区拡張トレンチ出土遺物実測図（１） ……26
第19図　Ⅲ−ａ区拡張トレンチ出土遺物実測図（２） ……27
第20図　Ⅲ−ａ区拡張トレンチ出土遺物実測図（３） ……28
第21図　Ⅲ−ａ区拡張トレンチ出土遺物実測図（４） ……29
第22図　Ⅲ−ａ区出土遺物実測図（１） ……29
第23図　Ⅲ−ａ区出土遺物実測図（２） ……30
第24図　Ⅲ区出土遺物実測図……30
第25図　周辺地形図……32
第26図　周辺地籍図……33

図版目次

図版１　Ⅲ−ａ区４号堀検出状況・完掘状況 ……37
図版２　Ⅲ−ａ区４号堀土層断面 ……38
Ⅲ−ａ区２号道路状遺構検出状況
図版３　Ⅲ−ａ区２号道路状遺構土層断面 ……39
Ⅲ−ａ区完掘状況
図版４　Ⅲ−ａ区完掘状況 ……40
Ⅲ−ｂ区完掘状況
図版５　Ⅲ−ｂ区完掘状況 ……41
図版６　Ⅲ−ｂ区20・21号溝完掘状況 ……42
Ⅲ−ｂ区13号土坑
図版７　Ⅲ−ａ区出土遺物 ……43
図版８　Ⅲ−ａ区出土遺物 ……44
図版９　Ⅲ−ａ区出土遺物 ……45
Ⅲ−ｂ区出土遺物
図版10　拡張トレンチ出土遺物……46
図版11　Ⅲ−ａ区２号道路状遺構出土遺物 ……47
Ⅲ−ａ区出土遺物
図版12　Ⅲ−ａ区出土遺物 ……48

表 目 次

第１表　熊本北バイパス関連埋蔵文化財…… 2
第２表　対照表…… 8

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　一般国道３号熊本北バイパス改築事業と埋蔵文化財について

一般国道３号熊本北バイパス（以下「北バイパス」という）は、熊本市とその周辺地域の交通網の整備の一環として一般国道３号と57号線を結ぶ主要幹線道路として昭和40年代に計画された。一般国道３号の熊本市四方寄町（旧飽託郡北部町四方寄）から一般国道57号熊本東バイパスとの接続地点である熊本市新南部４丁目に至る総延長距離が約7.6㎞の区間である。

昭和47年度に分布調査の依頼を当時の建設省熊本工事事務所から受けた熊本県教育委員会は、遺跡台帳との照合及び現地踏査を実施し12箇所の遺跡の存在を回答している。その後、事業の進展に伴い、東バイパスとの分岐点から徐々に試掘・確認調査を実施した。昭和58・59年度実施の「西谷遺跡」、昭和60年度実施の「上西原遺跡」は現在「新南部遺跡群」の中に含まれている。以前竜田陳内南遺跡と呼ばれた遺跡は、その後の調査で「竜田陳内遺跡」として、昭和61年度に本調査を行っている。龍田陳内北遺跡、緑ヶ丘遺跡、緑ヶ丘山ノ神遺跡については確認調査を実施したが、遺構・遺物等を検出せず、本調査対象から外した。その後新たな遺跡の発見等により、庵ノ前遺跡が平成４年から７年度に、迫ノ上遺跡が平成３年から７年度に、古閑山遺跡が平成４・６年度に、それぞれ本調査を実施した。また平成11年度には急遽伝てっぽう塚の調査を行った。その後、平成13年度には「船入遺跡」を試掘調査で確認し、本調査を実施した。その結果、これまで９箇所の埋蔵文化財調査を実施した。また、須屋城跡は、西合志町教育委員会によって平成13年度から調査が実施され、さらに確認調査の結果、遺跡範囲も修正した。

第２節　調査に至る経過

今回報告する「船入遺跡」の第２次調査結果報告は、平成13年度に実施した第１次調査の際、未買収地であった白百合保育園部分と町道部分の調査について報告したものである。

前回調査の際に、用地取得後、調査を実施することとなっていたが、遺跡の存在が不明確であったので、平成17年３月23日に確認調査を実施し、溝状遺構や土坑の存在することを確認した。そこで、国土交通省熊本河川国道事務所調査第二課と協議し、平成17年度事業として実施することとなった。調査面積は、旧白百合保育園の用地と道路敷きの部分の計375㎡であった。道路敷きの部分については、熊本河川国道事務所・西合志町と協議し、町道である道路の一部を路線変更し、調査を実施した。

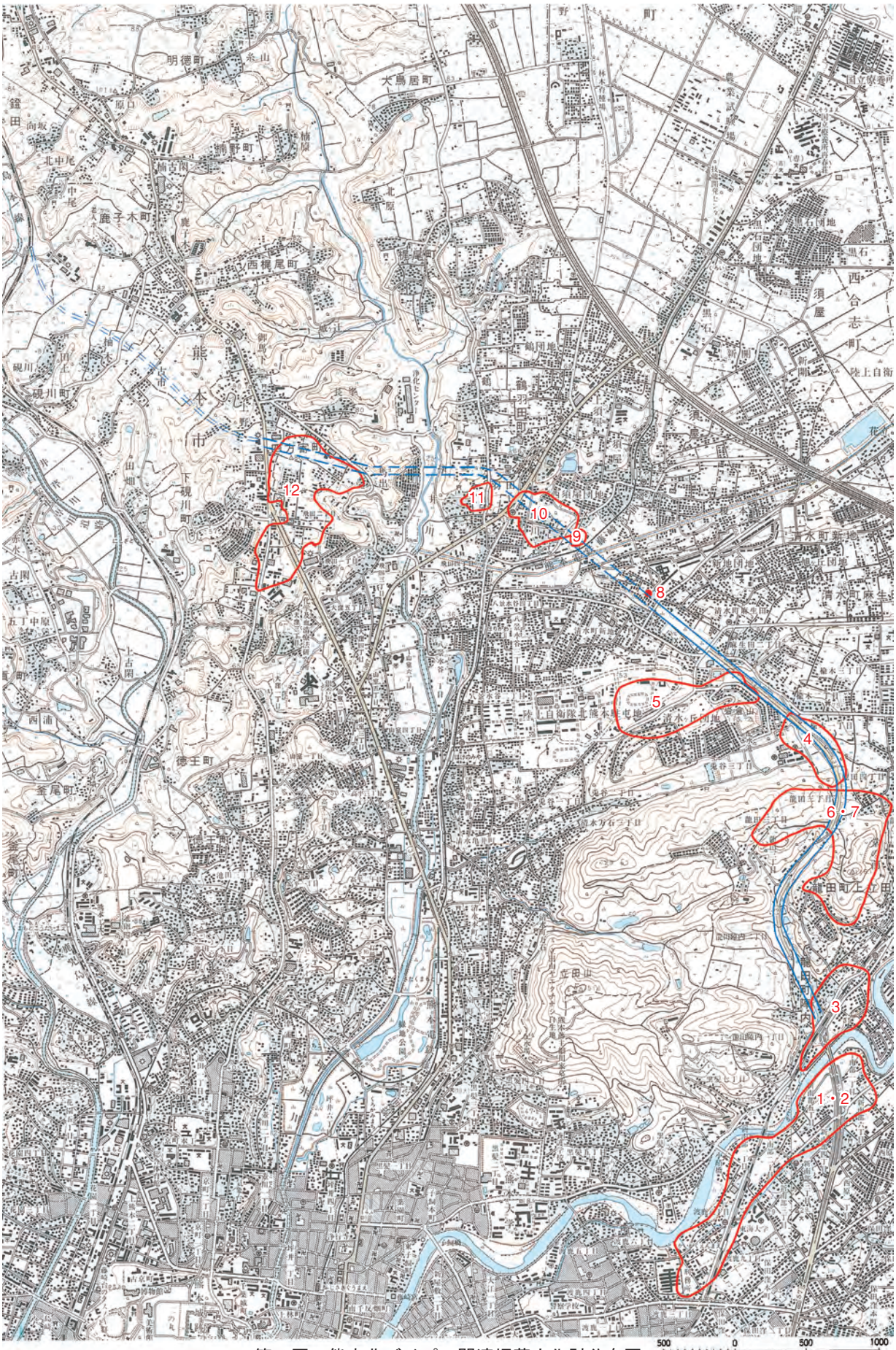
第３節　調査の組織

【平成17年度　本調査】

調査責任者　梶野英二（文化課長）
　　倉岡　博（課長補佐）
調査総括　　高木正文（課長補佐兼文化財調査第一係担当）
本調査担当　坂田和弘（参事）　　濱田教靖（非常勤嘱託）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　　四元正明（主幹兼総務係長）　　塚原健一（参事）　　小谷仁志（主任主事）
調査指導・助言及び協力者（敬称略・順不動）
　　浦田信智（旧西合志町教育委員会・現合志市教育委員会）

第１表　熊本北バイパス関連埋蔵文化財

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査面積(㎡)	調査期間	時　　代	主な遺構・遺物
1	上西原遺跡	熊本市新南部町 上西原	9,200	S60.5.21～ S60.9.19	縄文～奈良	縄文、弥生、古墳時代の集落跡、弥生時代の甕棺遺跡の他、奈良時代の寺院跡
2	西谷遺跡	熊本市新南部町 西谷	1,500	S59.2.14～ S59.3.31	弥生～平安	竪穴住居址、壺、甕、高杯
3	竜田陳内遺跡	熊本市竜田町大字 陳内字戸ノ上	3,500	S63.5.15～ S63.12.25	縄文～古墳	住居址、縄文土器、石器
4	庵ノ前遺跡Ⅲ	熊本市清水町 楡木庵ノ前	6,900	H4.7.1～ H7.6.28	旧石器～古墳	石器、縄文土器、甕棺、紡錘車、ガラス玉
5	岩倉山中腹遺跡	熊本市清水町大字 兎谷	4	H7.6.13～ H7.6.19	弥生中期	甕棺墓１基
6	古閑山遺跡	熊本市龍田町 古閑山字天神免	4,500	H4.9.1～ H5.3.31	旧石器～古墳	石器、縄文土器、鉄刀子、銅環、ガラス玉、住居址、木棺墓、石棺墓、円形周溝墓
			3,000	H6.1.18～ H7.7.10		
7	迫ノ上遺跡	熊本市龍田町 字迫ノ上	3,310	H3.11.5～ H4.6.10	縄文～古墳	竪穴住居址、掘立柱建物、集石、埋甕、縄文土器、石器、紡錘車、勾玉、ガラス玉、土師器、須恵器
		字高阪	2,580	H6.4.19～ H6.9.7		
		字迫屋敷	510	H7.5.12～ H7.7.1		
8	伝てっぽう塚	熊本市清水町大字 砥石	570	H11.2.1～ H11.3.8	南北朝～近代	塚、溝、土師器、青磁器、染付
9	船入遺跡	合志市須屋字船入	3,600	H13.9.17～ H14.3.25	南北朝～室町	堀、掘立柱建物、道路状遺構、階段状遺構、土坑、土壙墓、青磁、白磁、土師器、鉄製品、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器
		合志市須屋字 塔ノ木	375	H17.6.7～ H17.7.26	縄文、南北朝～近代	堀、道路状遺構、土坑、溝、青磁、白磁、土師器、鉄製品、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、縄文土器、弾丸
10	須屋城跡	合志市須屋字 下屋敷他		H13～H18	縄文、弥生、中世	堀、掘立柱建物跡、土塁、土坑、環壕、青磁、白磁、土師器、瓦質土器、鉄製品、縄文土器、弥生土器
11	羽田遺跡	熊本市鶴羽田町 羽田			古代～中世	
12	飛田遺跡群	熊本市飛田町 塔ノ木他			縄文～古墳	



第１図　熊本北バイパス関連埋蔵文化財分布図

【平成１８年度　整理作業・報告書作成】

調査責任者　梶野英二（文化課長）
　　江本　直（課長補佐）
調査総括　　高木正文（課長補佐兼文化財調査第一係担当）
整理担当　　坂田和弘（参事）　　赤星和美（非常勤嘱託）
調査事務局　吉田　惠（課長補佐）
　　高宮優美（主幹兼総務係長）　　塚原健一（参事）　　小谷仁志（主任主事）

第４節　調査の方法と工程

１　調査の方法

調査に当たって、第１次調査で掘削された部分との整合をみるため、一部掘削部分を重ねることを考えたが、埋め戻し状況と工事工程との関係から十分照合させて表土剥ぎ作業を実施できなかった。

前回の調査と同様に、世界測地系に沿って調査グリッドを設定した。調査グリッドを示す杭はただ、調査面積が狭く、包含層もほとんどなく、遺構も割と単純であったため、遺構実測以外でグリッドを利用することはなかった。

表土剥ぎの過程で、使用されている水道管が出土したため、その部分の掘削を中止した。また、攪乱も見られたため、調査範囲から除いた。

２　調査の経過

本調査は、平成17年６月７日から７月26日までのおよそ２ヶ月を要した。

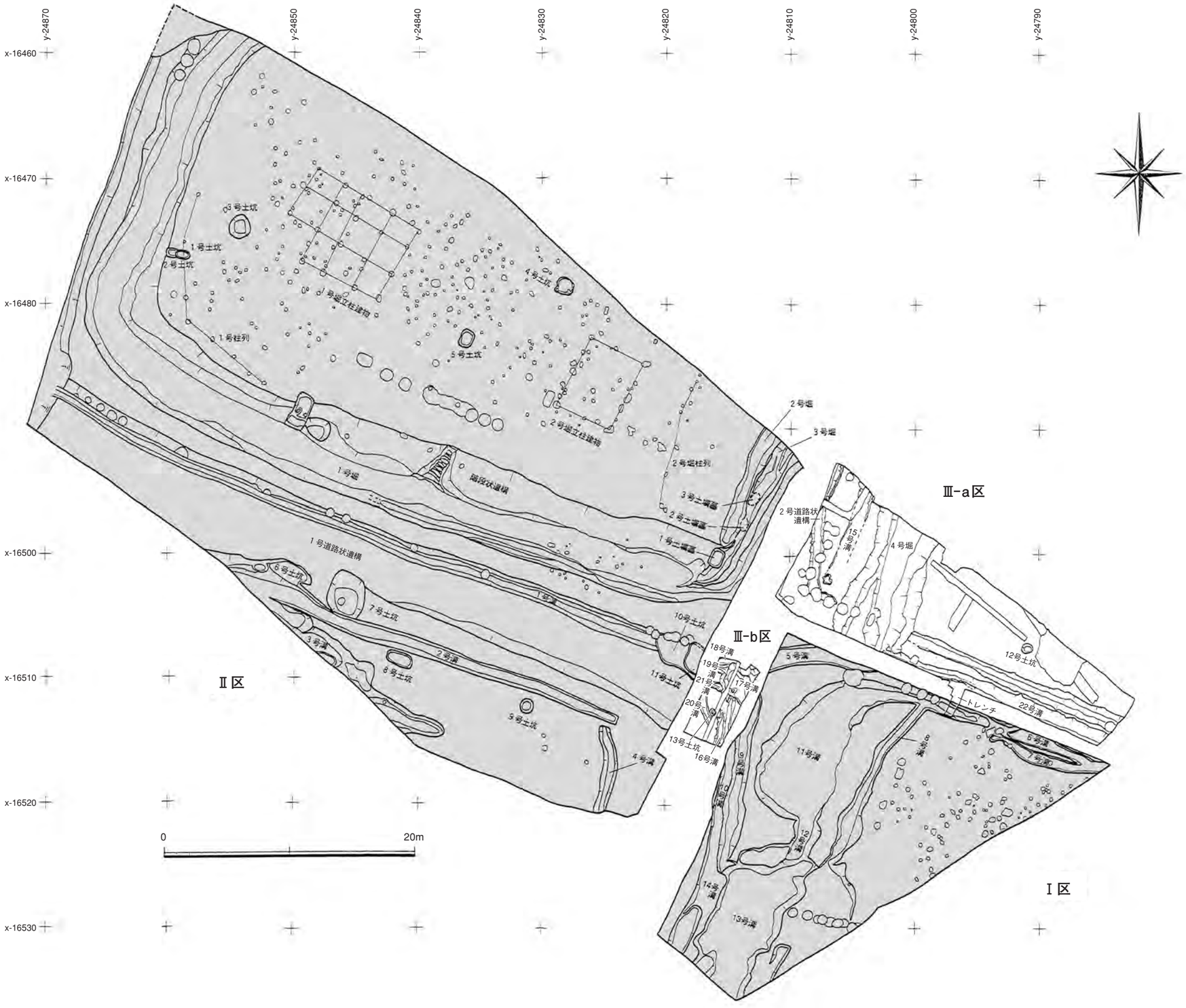
６月７日からバックホウによる表土掘削を開始し、８日には掘削を終了した。表土剥ぎは保育園と道路敷き部分を一気に剥ぎ取ることとしていたが、途中で使用中の水道管の出土や攪乱による破壊の跡が確認できたため、大きく２箇所に分けて表土を剥ぐこととした。そのため、調査区をⅢ−ａ区とⅢ−ｂ区に分けることとなった。また、その際、その周囲にあった木の根株はそのまま残し、手作業で除去することとした。

表土剥ぎ終了後に作業員を導入し、手作業による遺構精査及び根切りを行った。その時点でやや大規模な溝状遺構を検出した。調査区は、全体面積で400㎡程度の広さの比較的狭い調査区設定であるが、区内北西部付近で、現在使用されている埋設水道管が発見され、この水道管と周囲１ｍ前後は掘り下げず残し、調査区外とした。その為、調査区が二つに分かれる形となったので、この時点では、広い調査区を「船入２次−ａ区」とし、道路に設定した狭い調査区を「船入２次−ｂ区」とした。

調査は、ａ区から開始し、随時ｂ区へと調査を進めていった。最初に確認したのがＳ−01（大溝状遺構）であった。遺構の検出状況を中判カメラで撮影し、Ｓ−01内に幅２ｍのトレンチを設定し掘り下げを開始した。また、Ｓ−01とは別に、調査区の西端を調査区の切れ目と平行に北西から南東方向に走るやや幅広の溝状の落ち込みが存在しており、これが遺構かどうかを確認するために、幅１ｍのトレンチを設定し、40㎝程度掘り下げた。

６月13日の週には、４級基準点の設置や５ｍのグリッド杭を設置した。調査区では、先のＳ−01の掘り下げを進めた。他に３条の溝状遺構と多数の近現代期の芋穴を確認し合わせて掘り始めた。このうち、Ｓ−02については掘削したところ、道路状遺構と確認した。また、攪乱を掘り進めると、陶磁器や瓦質土器の破片が出土した。また、Ｓ−02に近接した攪乱で縄文土器片を認めた。ｂ区では、調査区東半分に広がる灰褐色砂質土に２本のトレンチを設定し掘り下げると、最も深いところで60㎝程下がり、また、西から東へ下がっていることから、これも大溝が何か大きめの遺構であろうと考え、中央部に土層観察用のベルトを残し、全面掘り下げを始めた。

６月20日の週には、ａ区の調査区南端溝状遺構やＳ−01の掘り下げ、ｂ区の溝状遺構の掘り下げを進めた。中



第２図　船入遺跡全体遺構図

世の遺物出土は少ない。やや雨の降る日が多く、作業に支障が出てきた。

６月27日の週も雨天が多く、作業が遅れ気味となる。Ｓ−01の掘り下げ作業は順調に進めたところ、調査区南側の調査区外線沿いに落ち込みを確認した。この落ち込みはＳ−01より区外線沿いに南東方向に延びていた。Ｓ−01との関係を探るため、Ｓ−01内の南付近に北東から南西に延びる土層観察用ベルトを設定した。ｂ区ではＳ−04の掘り下げを行った。７月１日から九州文化財研究所が委託された実測作業を開始し、Ｓ=1/20の平面実測図をａ区の北側より始めた。

７月４日から７月６日までは雨天により現場作業が停滞しほとんど進まなかった。

７月７日より作業を再開した。ａ区では、Ｓ−01より南東方向に延びる調査区外線沿いの掘り込みの掘り下げを行う。あわせてその調査部分の掘り込みと、船入１次の調査遺構との関係を探るため南側へ1.7×5mのトレンチを設定し掘り下げ始める。また、北側区画線に沿って幅40㎝程度の長いトレンチを設定し、掘り下げ始める。ｂ区では、Ｓ−04によってきられる船入１次で検出していた１号溝につながりそうな溝でそれに平行する溝を掘削する。また、中央部よりやや南で確認していた土坑を半裁して掘り下げる。大きさが40〜50㎝程度の方形の落ち込みで、底近くで大きさ20㎝程度の礫を３個程確認した。時期等は不明。

７月８日には、ａ区でこれまで調査区（南西側）の掘り込み、もしくは落ち込みと呼んでいた掘りこみが、土層観察の結果からこの落ち込みの中に何らかの人為的な行為が加えられていることが分かったので、遺構番号Ｓ−09とした。実測作業は、Ｓ−02、04、06土層実測図を作成した。写真撮影は、ａ区の土層−①、ｂ区のＳ−04の土層について行った。

７月11日の週も雨天で作業が停滞し、７月15日に作業を再開した。ａ区は、全遺構の掘り下げも70％程度終了し、残すはＳ−02、Ｓ−08、Ｓ−09のみとなった。Ｓ−09の深度は深く、さらに調査区の関係から足元が斜めになっており、作業が困難で時間がかかっている。実測作業は、Ｓ=1/20遺構実測図を作成。

７月18日の週には、ａ区のＳ−01の精査、実測作業を進め、ほぼ終了。Ｓ−02bの調査を進め、硬化面及びその下部についても掘削完了し、実測図の作成を行った。その週の最後にはａ区の全掘写真を撮影した。そして、器材撤収準備を行った。７月23日には、ａ区の遺構及びトレンチ等の平面実測、Ｓ−01の土層断面実測を行い、ａ区全体の遺構実測を終了した。

７月25日には器材を撤収し、ａ・ｂ区の地形測量、Ｓ−01、Ｓ−02b〜Ｓ−09の土層断面を注記し現場作業を終了した。翌７月26日には、倉庫等の最終片づけを行い、調査全体を終了した。

第５節　整理作業・報告書作成の方法と工程

整理作業のうち一次作業としては、平成18年度当初から開始した。まず、水洗い・注記作業を行ったが、出土遺物は少なく、結果的にコンテナ５箱ほどであった。その後、接合作業を行い、実測に備えて、遺物の選別を行った。選別に際しては、出土した土器・石器・瓦質土器・陶磁器などから遺構や遺跡全体の特徴を示すものに注視した。これらの作業を行う際に、平成15年に実施した「船入遺跡」１次調査の成果との関係にも注意した。

その後、二次整理作業として、遺物実測と必要な図をさらに作成した。それらをトレース・レイアウト作業を行い、最終的に挿図作成を完了した。挿図がほぼ完成した頃、遺物写真の撮影を行った。図版としては、現場の調査状況や遺構の写真と、先の遺物写真をもとに作成した。その後、挿図・写真図版を総合し、文字原稿を作成した。

なお、遺構番号は最終的に、Ⅰ区・Ⅱ区から繋がる番号を遺構の種類ごとに一連のものとした。その結果、調査時及び水洗い・注記の際まで使用した遺構番号と、本報告書遺構番号が異なることとなった。それらを対照表としたのが第２表である。

第２表　対照表

	調査時	報告書掲載		調査時	報告書掲載
Ⅲ－ａ区	Ｓ－01	４号堀	Ⅲ－ｂ区	Ｓ－04	16号溝
	Ｓ－02	２号道路状遺構		－	17号溝
	Ｓ－03	15号溝		Ｓ－05ａ	18号溝
	Ｓ－08	12号土坑		Ｓ－05ｂ	19号溝
	Ｓ－09	22号溝		Ｓ－06	21号溝
				Ｓ－07	20号溝
				Ｓ－10	13号土坑

第Ⅱ章　調査Ⅲ区の調査成果

第１節　基本層序

第一次調査での基本層序は、第Ⅰ層：表土及び床土、第Ⅱ層：茶褐色土（旧耕作土）、第Ⅲ層：黒褐色土（ニガ土）、第Ⅳ層：黄色土（ソフトローム層）、第Ⅴ層：黄色砂礫層としていた。

今回の調査でも基本層序は、第一次調査と大きな差はないが、Ⅲ−ａ区は保育園として造成されており、第Ⅰ層に当たる層は表土もしくは客土である。第Ⅱ層に当たる層は部分的に残っていた。第Ⅲ層とされる黒褐色土層をニガ土とすればここでも確認できた。ただ、その上に部分的ながら暗褐色土層がある。この層は「黒ボク層」と考えられ、これをⅢ層とし、「ニガ土」層をⅣ層とした。両層は便宜的に色調を分けたが、Ⅲ層自体が部分的なため、明確に色調の変化を見極めるのは難しく、調査区壁面で見分けることが辛うじてできただけである。このⅢ層に縄文時代の遺物が含まれると考える。

さらに下層の層序としては、黄色土（ソフトローム）層をⅤ層とし、その下層の黄褐色砂礫層をⅥ層とした。

調査Ⅲ−ａ区ではⅢ層またはⅣ層の上面で遺構確認を行った。Ⅲ−ｂ区では、道路工事等によるものか、すでにⅣ層まで失われていたので、Ⅴ層の上面で遺構確認を行った。いずれの調査区でも遺構の埋土は確認面とした層と異なる色調であったため、遺構を確認しやすかった。

第２節　遺構と遺物

１　遺構の出土状況

調査Ⅲ区は先にも記したようにⅢ−ａ区とⅢ−ｂ区に分けた。それぞれで遺構を検出したが、ａ区とｂ区の両方に渡る遺構はなかった。Ⅲ−ａ区からは堀が１条、溝が２条、土坑が１基出土した。Ⅲ−ｂ区からは溝が６条、土坑が１基出土した。Ⅲ−ａ区の主な遺構は４号堀と溝遺構で、これらの遺構のうちⅠ区・Ⅱ区から繋がる遺構と考えられるものは少なく、ほとんどが独立したものと考えられる。また、Ⅰ区・Ⅱ区の調査成果に従い、先にも記したように本報告では遺構番号は前回の報告書記載番号に続けている。

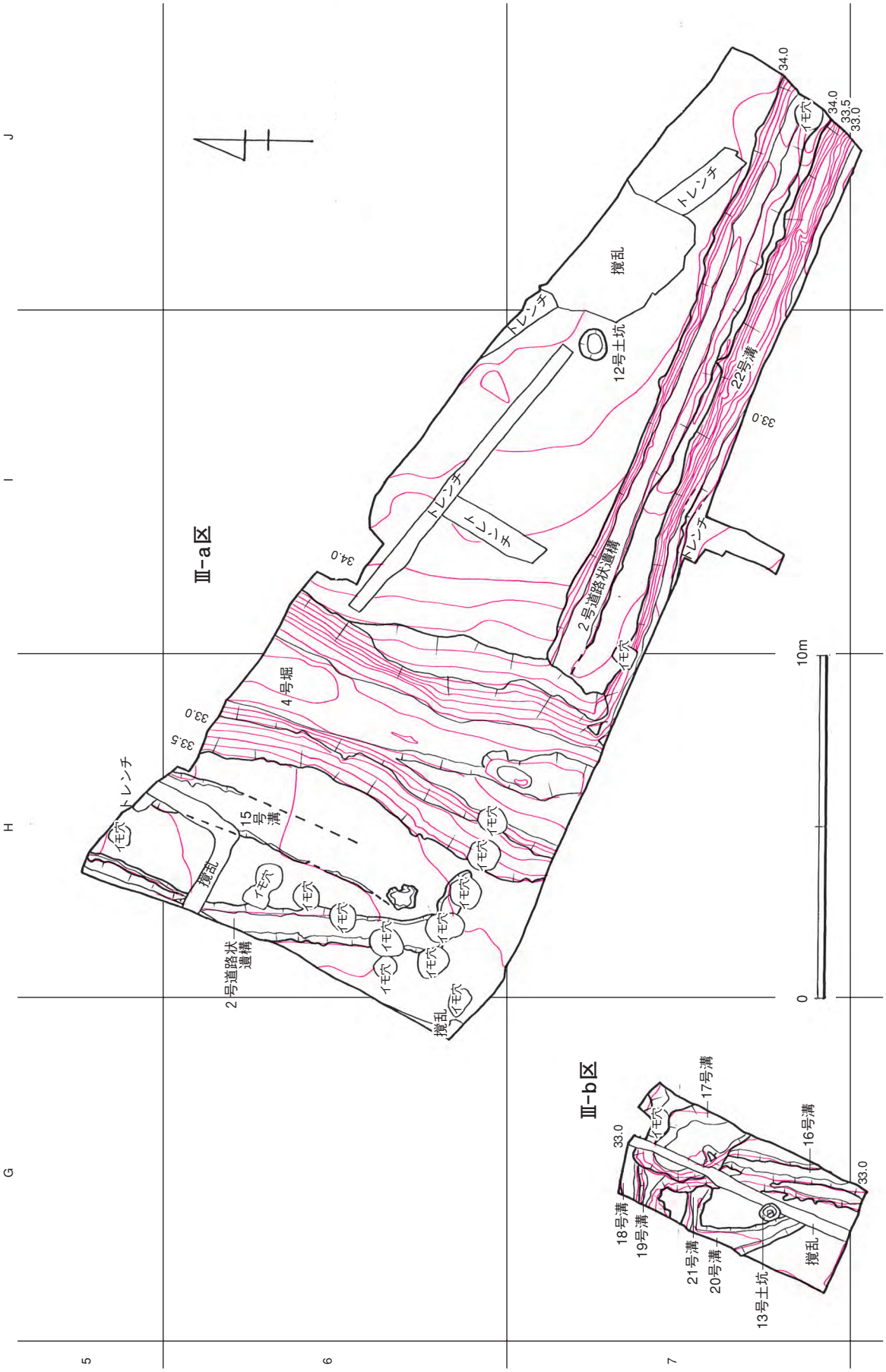
22号溝は、前回の遺構配置図と今回の遺構配置図とを重ねると、Ⅰ区の５号溝と連続したものである可能性が高い。しかし、確実に遺構が連続していることを確認できなかったので別遺構として番号をふった。また、Ⅲ−ｂ区の18号溝についてはⅠ区の８号溝と、16号溝についてはⅠ区の10号溝との連続をそれぞれ考えることができるが、上記と同じくそのことを確認できなかったのでやはり別遺構として番号をふった。

２　堀

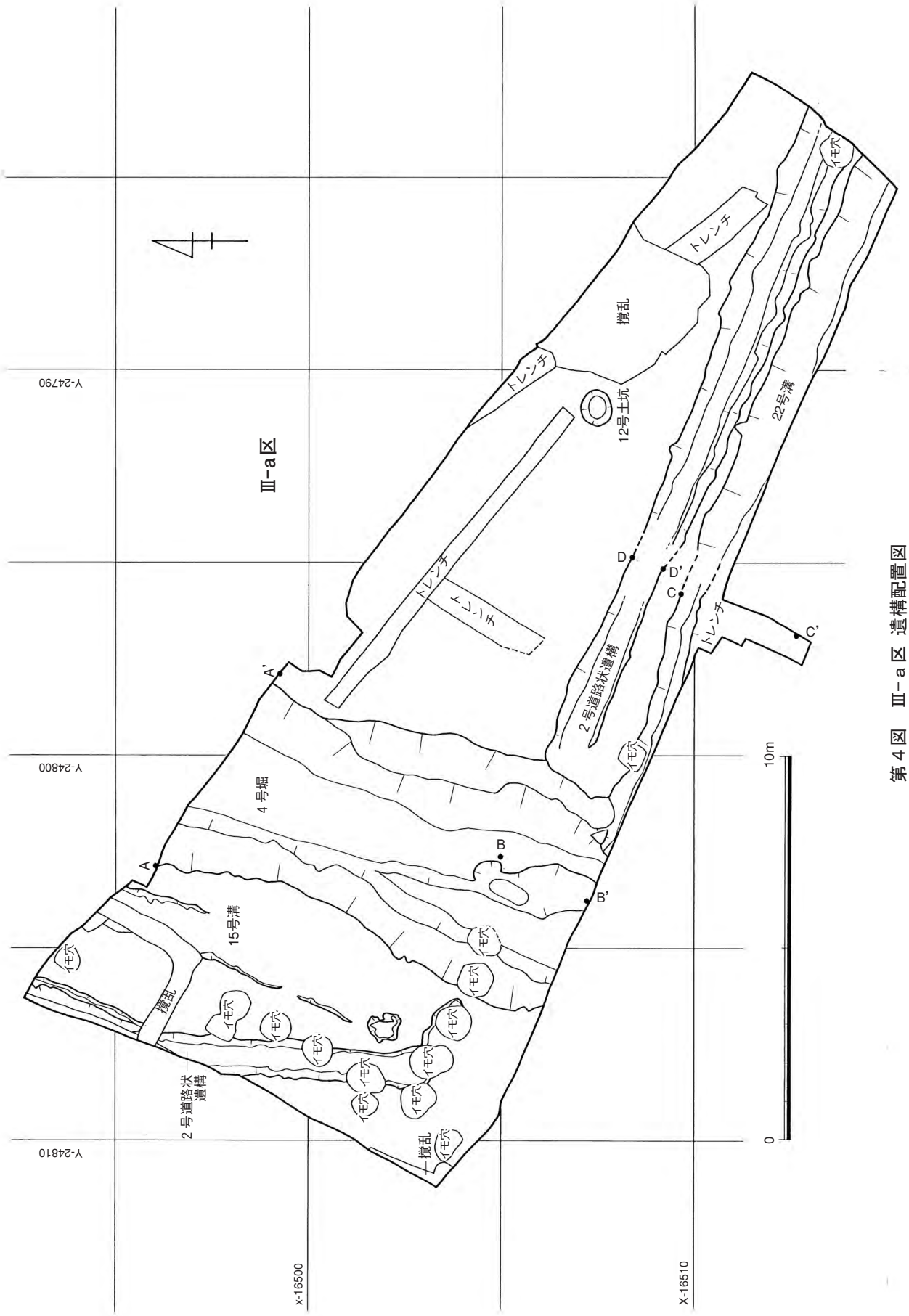
（１）４号堀

この遺構は、調査Ⅲ−ａ区で検出した遺構である。調査Ⅱ区で検出した１号堀と類似したもので、検出面での幅が約５ｍ、検出面からの深さが約１ｍを測る。調査区内の約10ｍ分を検出した。調査区範囲が限られていたことと、前回調査のⅠ区がすでに削平されていたことから、南側にどのように遺構が延びていたかはっきりしない。

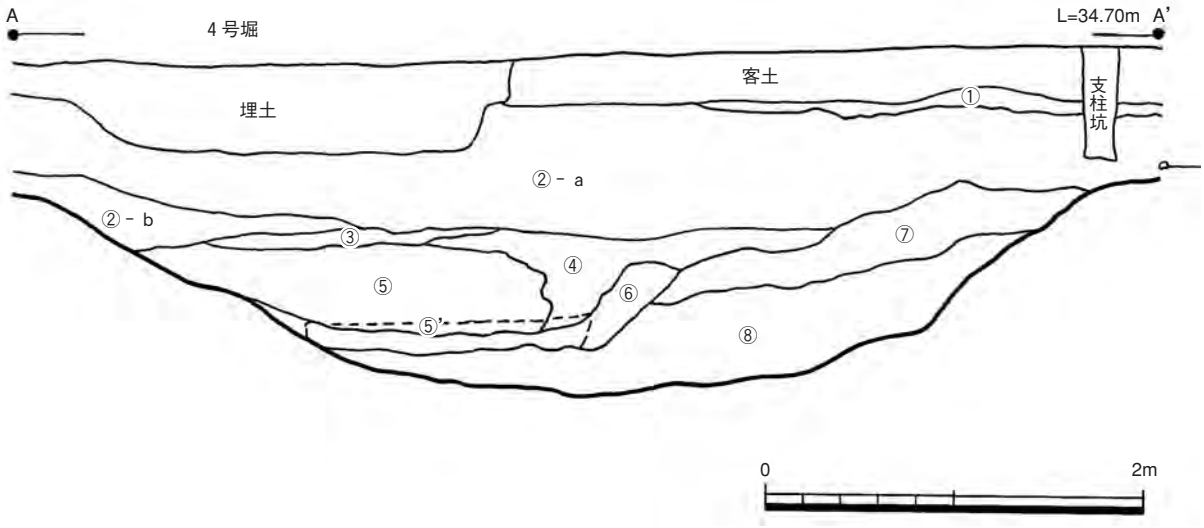
この遺構の北側状況は、調査区外に延び不明であるが、地形的にはさらに延びていく可能性が大きい。この遺構の埋没状況と、その確認面よりも上位の表土層までの状況を見るため、この遺構の北側部分に当たる調査区限界壁の断面を土層観察用壁とした。本報告ではその断面をＡ−Ａ’とした。表土層は幼稚園造成時の客土である。①層は、この地が以前水田として利用されていた時の名残であると思われる床土跡と考えられる。②層はａ・ｂの２層に分けているが、基本的に遺構と直接関わらない層である。ただ、下部は遺構の埋土状況に


Ⅲ-a区
Ⅲ-b区
4号堀
15号溝
2号道路状遺構
12号土坑
13号土坑
16号溝
17号溝
18号溝
19号溝
20号溝
21号溝
22号溝
トレンチ
イモ穴
撹乱
34.0
33.5
33.0
0
10m
5
6
7
G
H
I
J

第３図　遺構配置図



第４図　Ⅲ－ａ区　遺構配置図



①層　暗褐(10YR3/3)
よくしまった、やや灰色気味の土。
最下面に赤褐色の鉄分の集積あり。
砂粒(径0.5㎜前後)を、多く含む。

②－a 層　極暗褐(7.5YR2/3)
黄橙色・橙色小粒子(径1㎜大)が、小礫(径1㎜～5㎝)が多く混じり、空隙多く粗である。

②－b 層　極暗褐(7.5YR2/4)
層境界の上面がややしまる。
黄橙色粒子が②－a 層よりも多く混じり、小礫(径1㎜～5㎝)が多く混じる。

③層　黒褐(7.5YR3/2)
硬くしまり、硬化面を形成する。
黄橙色粒子が全体の20%ほど入る。

④層　極暗褐(7.5YR2/3)
②－a 層によく似、小礫(径2㎜～5㎜)が多く混じり、空隙も粗である。

⑤層　黒褐(10YR2/3)
地山の橙色(7.5YR6/8)のローム層がブロック状もしくは粒子単位として混じる。

⑤'層　黒褐(10YR2/4)
⑤層に見られる橙色粒子がほとんど入らない。

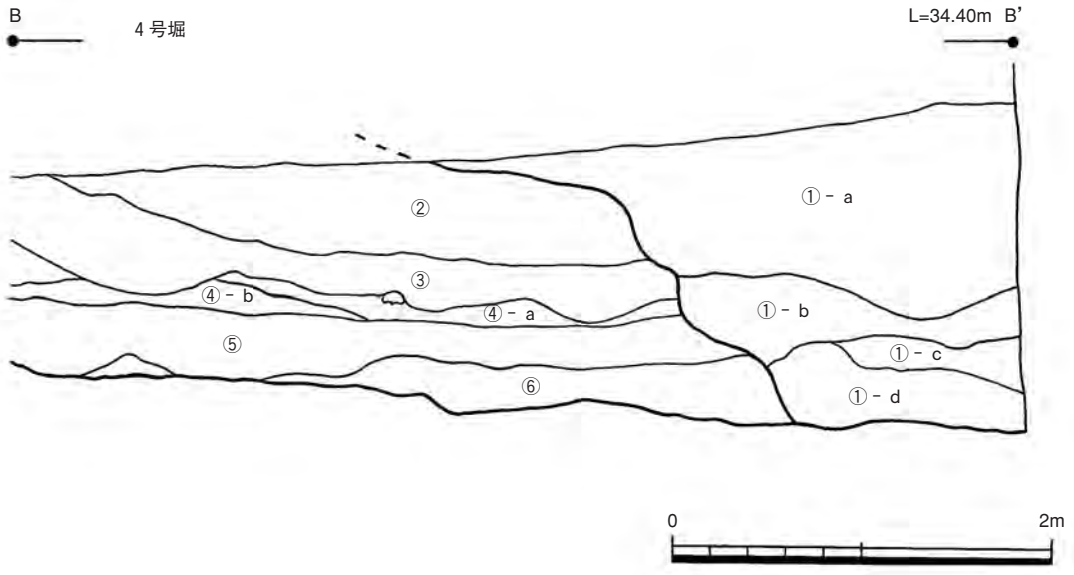
⑥層　黒褐(7.5YR3/2)
薄い層の集合で、部分的に硬化しよくしまる。
橙色粒子の小礫がわずかに混じる。

⑦層　黒褐(10YR2/2)
④層に比べややしまる。
橙色粒子を10%～20%ほど含み、小礫(径5㎜～10㎜)もわずかに混じる。

⑧層　黒褐(7.5YR3/2～2/2)
上面では橙色粒子が30%程入りやや暗い、最下面では、橙色粒子は5%程度となり、やや明るい。
地山に円礫(径10㎝大)礫が混じる。

第５図　Ⅲ－ａ区　４号堀土層断面実測図（１）

合わせてややへこむ形になる。③層以下がこの遺構の埋土と考えている。土層断面を詳細に観察してみると、③層と⑥層が硬化しており、その面で一旦この遺構の床面が形成されていたようである。硬化面が形成されているところから、道路として利用されていた可能性が高い。遺構の掘り下げ中にその硬化面を確認していたが、どのような幅や長さがあったかを平面上で掴むことはできなかった。



①－ａ層　灰黄褐(10YR5/2)
砂質土層(砂4:6粘)。

①－ｂ層　暗灰黄(2.5YR4/2)
砂質土層(砂4:6粘)。
①－ａ層に比べやや土色が濃くなる。
②－黄色粒子(径2㎜～5㎜)が多量に混じる。

①－ｃ層　暗灰黄(2.5YR4/3)
ｂ層とほぼ同じ質感と土色が濃い。

①－ｄ層　黒褐(2.5YR3/2)
砂質土層(砂4:6粘)。
①－ａ層に比べ粗である。

②層　オリーヴ褐(2.5YR4/3)
砂質土層(砂5:5粘)。
あまりしまらず水分が乏しい。

③層　黄褐(2.5YR5/4)
水分の少ないしまりのない土。
黄色粒子(径2㎜前後)を多量に含む。

④－ａ層　灰オリーヴ(5Y4/2)
ややしまる粘質土。

④－ｂ層　にぶい黄(2.5YR6/3)
砂質土。

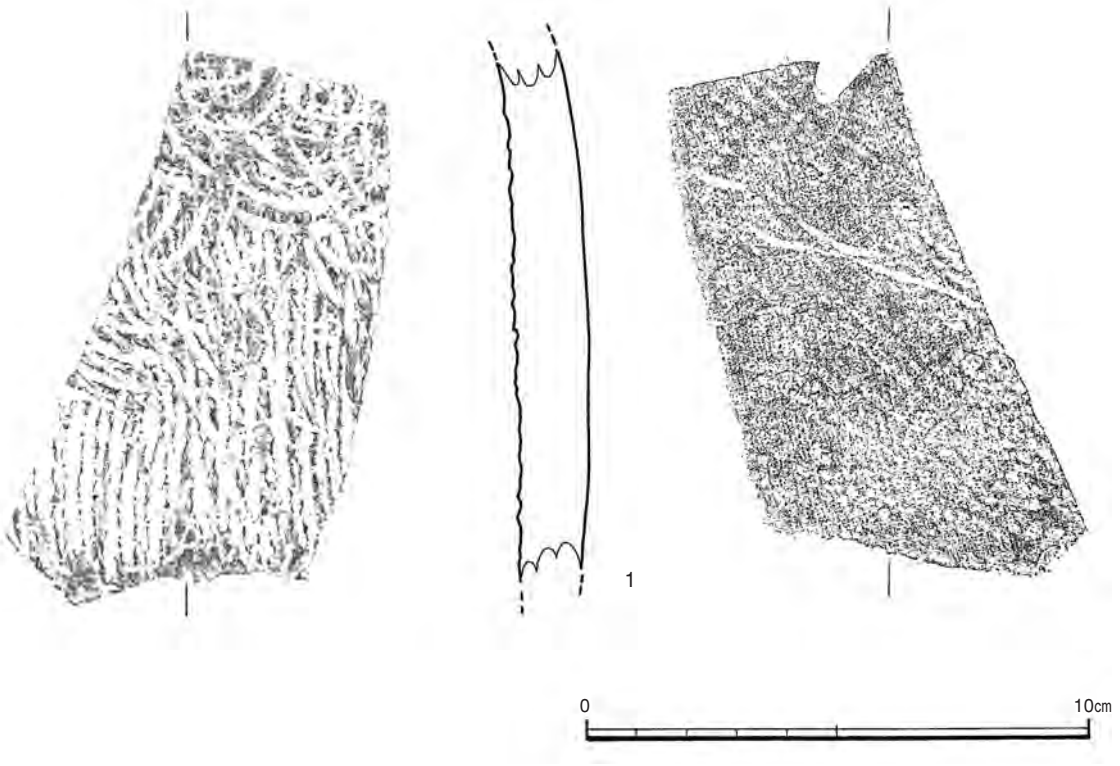
⑤層　オリーヴ褐色(2.5YR4/3)
ややしまる混合土層。
黄色粒子を多量に含む。

⑥層　黒褐(2.5YR3/2)
ややしまる粘質土。
①－ｄ層のすぐ横の土層で、土色もほぼ同じであるが、質感はまるで違う。

第６図　Ⅲ－ａ区　４号堀土層断面実測図（２）

また、この遺構に直交して別遺構を平面で確認したので、掘り下げ途中ではあったが、切りあい関係を確認するため、新たに土層断面のためのベルト状の土手を設定した。その断面をＢ－Ｂ’とした。この土層断面の観察から、この４号堀が調査区南側を走る溝によって切られていることが分かった。さらにこの堀自体が北側から南側に向かって低くなるように傾斜していることも確認できた。

出土遺物は、調査時には埋没状況を十分捉えることができず、層ごとの取り上げをしなかったため、この遺構全体の一括遺物として採取したにとどまる。したがって、時期差の大きい遺物を一同に提示する形になった。大まかには下位の遺物が上位のものに比べ、古いものが主となっていた。遺物は古代から近世・近代に至るも



遺物番号	種別	器種	遺構	調整		備考	写真図版
				外器面	内器面		
1	須恵器	大甕	4号堀	格子タタキ	同心円文アテグ		7

第７図　Ⅲ−ａ区　４号堀出土遺物実測図（１）

のである。

１は須恵器の大甕片である。内器面は上位に同心円文当て具痕、下位に平行当て具痕が見られ、外器面は細かい格子状のタタキ具痕が見られる。この土器はこのような特徴から古代のものであろう。

２・３は、瓦質土器である。２は、火鉢の口縁部片である。口縁端部が平坦で、口唇部が肥厚し突帯をなし、その下位にさらに一条の突帯を持ち、その間に菊花文スタンプを押される。３も同様であるが、内器面が剥離し、外器面のみの破片で、口唇部の突帯とその下位に菊花文の一部が見られる。

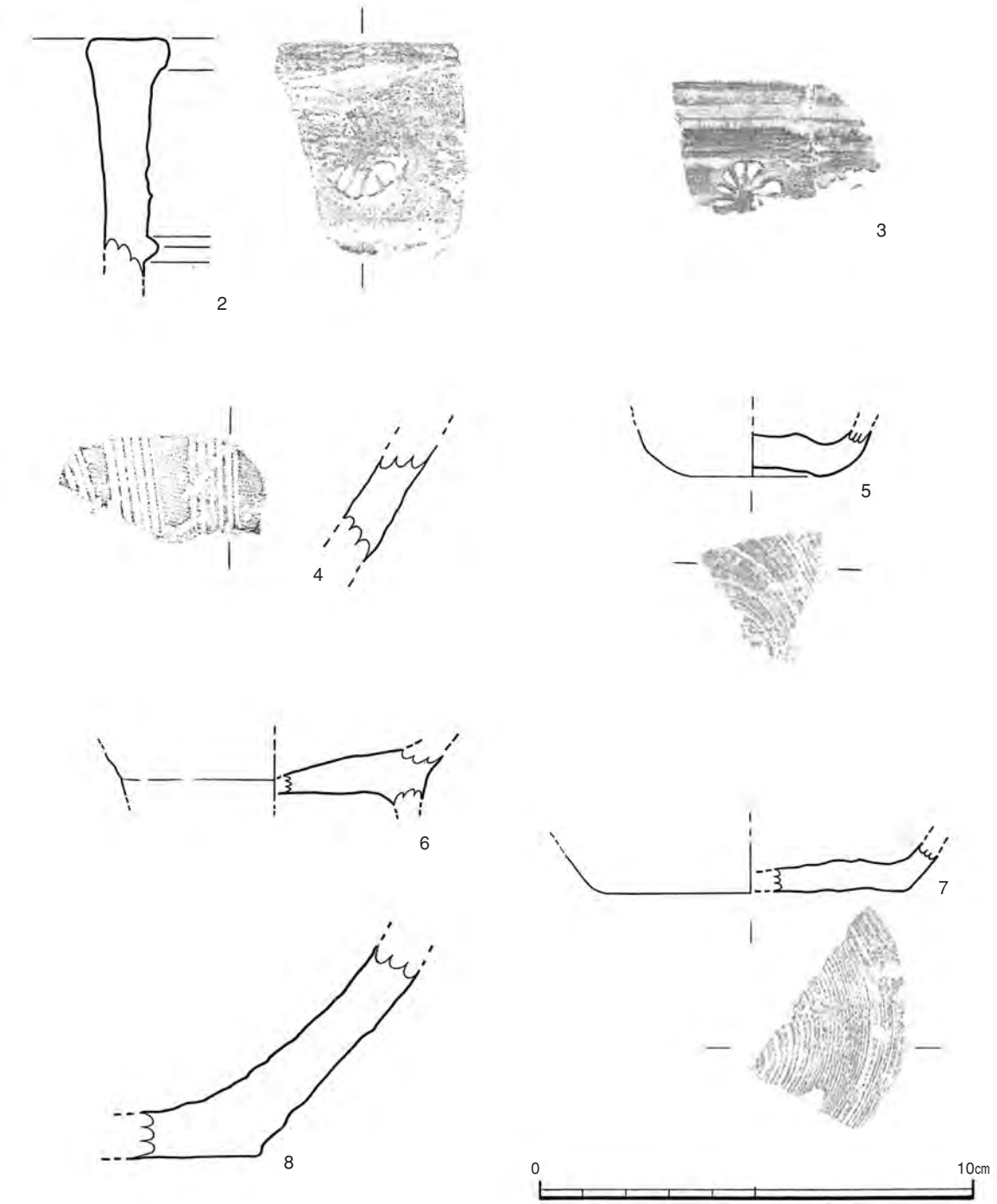
４は瓦質土器で、擂鉢の一部である。内器面に６条を単位とする櫛描き工具によるすり目が３条ほど見られる。調整は内器面にナデが施される。

５・７は、土師器である。５は小型の皿で復元底部径が３㎝ほどを測る。器壁は器形の割に厚い。外底面には糸切り痕が残る。７はやや大きめの皿で復元底部径が７㎝ほどを測る。焼成は良好でかなり硬く締まる。底部外器面には明確な糸切り痕が残る。

６は須恵器で高台付杯であろう。高台が欠損し、内器面もかなり剥離している。器形がやや不明確であるが、焼成状況などから古代のものである可能性がある。高台内部にヘラ記号か、単に調整時の傷か不明確であるが、１㎝ほどの刻み目が入る。

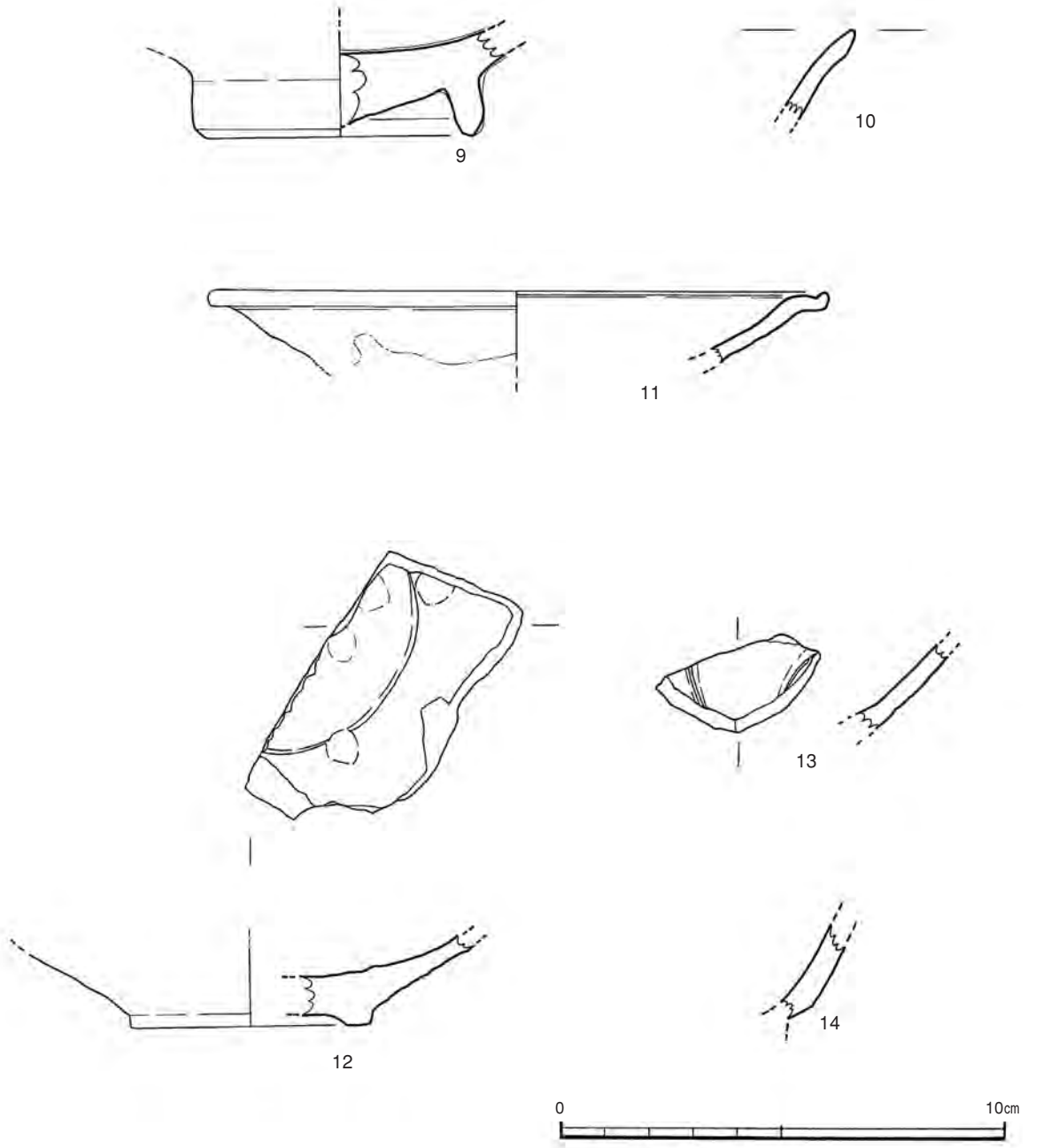
８は、須恵質土器の鉢片である。内器面には横方向のハケ目痕がわずかに残るが、大部分はナデ調整される。外器面には指頭圧痕がわずかに残る。大部分はナデ調整される。

磁器としては、９・10の青磁碗、13の白磁がある。９は底部片で高台部分である。内器面には細かい気泡と貫入がはいる。器壁は厚く、胎土色は暗灰色を呈する。外器面の釉はほぼ全面に施されるが、高台内に輪状に



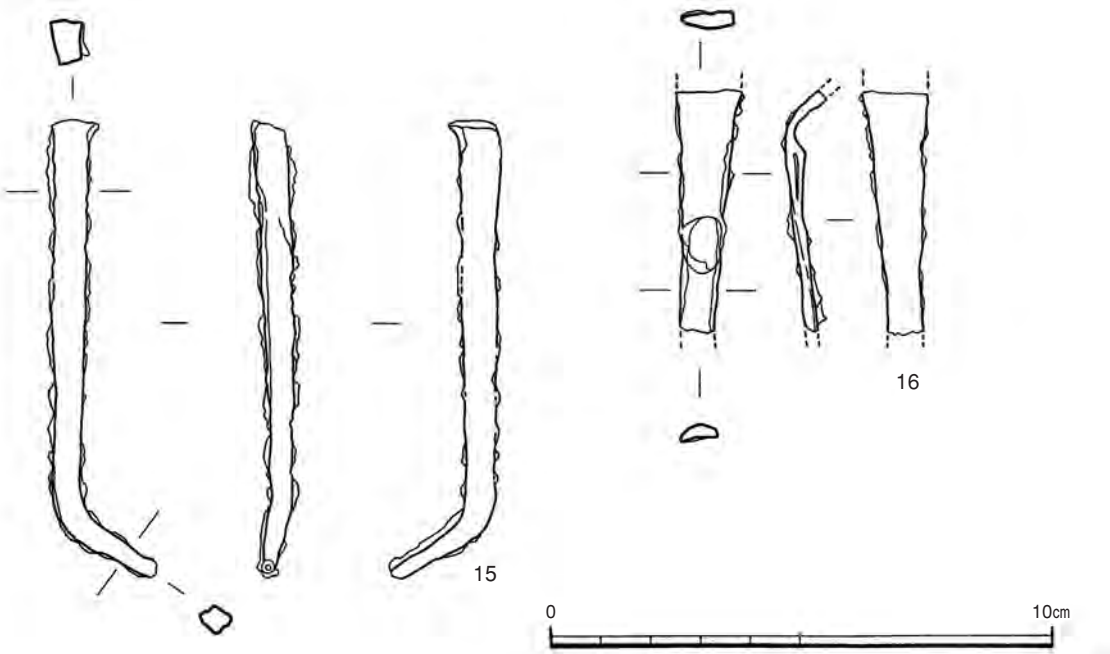
遺物番号	種別	器種	遺構	底径	調整		備考	写真図版
					外器面	内器面		
2	瓦質土器	火鉢	4号堀	―	横方向ナデ	ヨコナデ	菊花紋スタンプ	8
3	瓦質土器	火鉢	4号堀	―	ナデ		菊花紋スタンプ	8
4	瓦質土器	擂鉢	4号堀	―	ナデ	6本櫛目状工具ニヨルスリ目		8
5	土師器	Ⅲ	4号堀	(3㎝)	ナデ･糸切痕	ナデ		9
6	須恵器	高台付杯	4号堀	―	ヨコナデ	ナデ		8
7	土師器	Ⅲ	4号堀	(7㎝)	ナデ･糸切痕	ナデ		9
8	須恵質土器	鉢	4号堀	―	ナデ	ヨコ方向ニハケノ･後ナデ		7

第８図　Ⅲ−ａ区　４号堀出土遺物実測図（２）



遺物番号	種別	器種	遺構	法量		色調		備考	写真図版
				口径	底径	胎土	釉薬・染付		
9	青磁	碗	4号堀	―	(6.0㎝)	灰白 5Y7/1	すずかけの樹の色 C-216		9
10	青磁	碗	4号堀	(10.2㎝)	―	灰黄 5Y7/2	焦茶色 C-134		8
11	陶器	溝縁皿	4号堀	(14㎝)	―	灰白 5Y7/1	銀灰色 C-143		8
12	陶器	皿	4号堀	―	(5.2㎝)	にぶい赤褐 5YR	カーキー色(内面のみ) C-232		8
13	白磁	碗	4号堀	―	―	灰白 5Y7/1	すずかけの樹の色 C-216		9
14	陶器	天目碗	4号堀	―	(6.4㎝)	灰白 5Y7/1	漆黒(内面のみ) C-303		8

第９図　Ⅲ-ａ区　４号堀出土遺物実測図（３）



遺物番号	種類	遺構	法量				備考	写真図版
			長さ	幅	厚さ	重さ		
15	釘	4号堀	(10.0㎝)	1.0㎝	0.9㎝	13.75ｇ		―
16	不明	4号堀	(4.4㎝)	1.4㎝	0.4㎝	3.13ｇ		―

第10図　Ⅲ−ａ区　４号堀出土遺物実測図（４）

削り取っている。10は口縁部で、かなり薄手のもので、体部からやや外反し、口唇部分で弱く肥厚し尖り気味に収まる。13は白磁の碗の体部片である。内器面には片ケズリによる紋様の一部が見え、横方向のナデ調整痕も見える。外器面には横方向のヘラケズリ痕が見える。

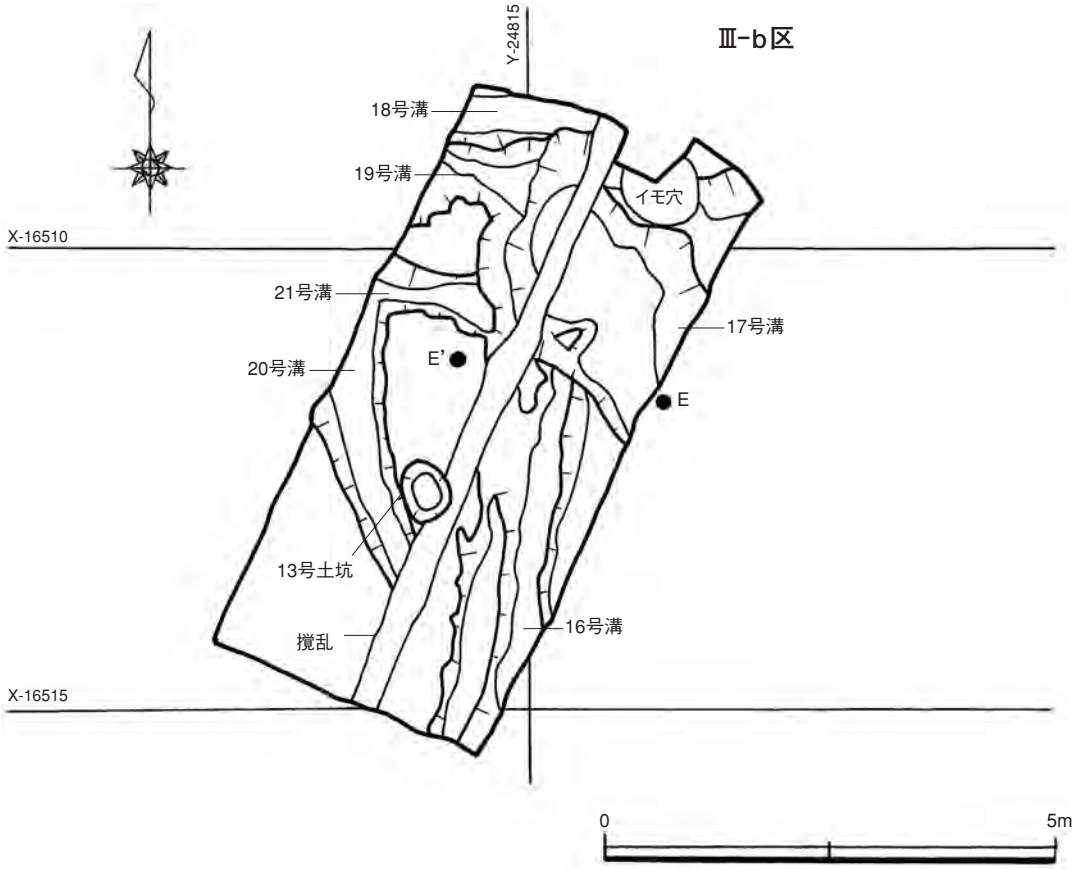
陶器としては、11・12・14がある。11は溝縁皿で、薄く灰釉がかかっているが、外器面はあまり釉がかかっておらず、体部以下に、釉は見られないようである。胎土中にはやや砂粒を含む。12は皿で、内器面のみに暗緑色の釉がかけられる。内器面には胎土目痕が残る。外器面のケズリだし高台は低く、不明瞭である。畳付部分に糸切り痕が残る。肥前系のもので、16世紀後半代のものであろう。14は、天目碗片であると考える。内器面のみに黒褐釉がかけられている。胎土は灰色を呈する。外器面はケズリによる調整で部位的に屈曲部を造りだし、最下部に高台の一部らしいケズリ痕がある。

鉄器としては15の釘と器種不明の鉄器16がある。15は断面が四角で、頭部が潰れ明確ではない。先端部分は折れ曲がり、最先端部は欠損している。残存長は約10㎝あり、欠損部を勘案すると三寸五分（105㎜）のものであろう。16はこの遺構の上位層から出土したものである。上部に比して下位が狭い板状のものであるが、上部と下部に欠損があり全体形は不明である。上部が折り曲っており、意図的に曲げられている可能性がある。

３　溝

（１）15号溝

この遺構はⅢ−ａ区の、主にH−６グリッドで確認したもので、ほとんど痕跡に近い状態であった。わずかに壁の立ち上がりを認められる。４号溝に平行しているようである。底部幅が約１ｍ、確認長が約７ｍを測る。



第11図　Ⅲ－ｂ区　遺構配置図

遺物の出土はなく、時期の確定も困難である。

（２）16号溝

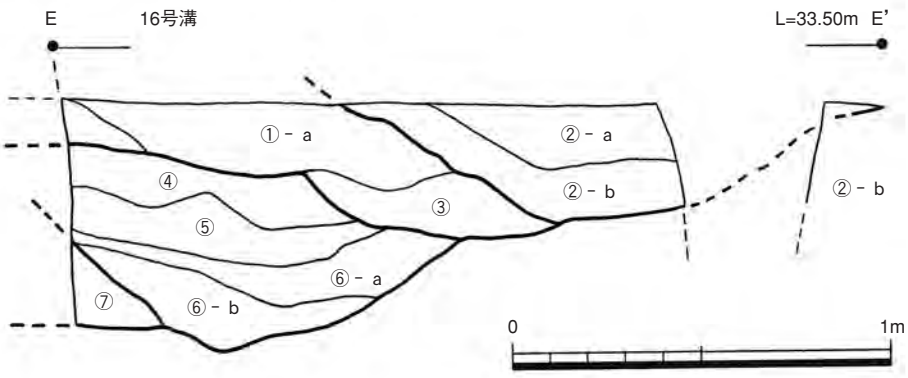
この遺構は、Ⅲ－ｂ区で検出した遺構である。底面の状況から、遺構としては一つのものではなく、少なくとも３条の溝状遺構が切り合ったものと考えている。17号溝との切りあいはとらえることができたが、それ以上の溝については、16号溝から17号溝にかけて残した土層観察用ベルトで確認できたものである。掘り下げ中には各遺構の違いを確認できておらず、単に段状に落ちる溝と思っていたが、土層を詳細に観察すると、埋土の状況から３条以上の溝の切りあいがあるのを認めた。完掘後にはそれぞれの遺構の片面の壁のみを残しているのみで、溝の幅及び延び方を正確に捉えることはできなかった。

17号溝との間には前後関係があり、土層観察用ベルトからみると、17号溝が古く、その上に埋土が堆積した後に、後に掘削されたと考えられる。

16号溝は、土層観察から確認面上部で幅が1.4m、底部が40cmほどを測り、断面が皿状を呈する。確認面からの深さは30cmを測る。埋土は大きく２層に分けられる。

出土遺物は出土層位、位置を記録しておらず、遺構内の出土として一括して採集している。ただ、先に記したようにさらに遺構の分割が可能と出土遺物数は割と多いが、16号溝は更に分かれているしたがって、17は青磁碗の底部片である。内器面の中心部付近に草花文らしき紋様がみえるが、釉が厚く被っているため明確には特定できない。内器面及び外器面の高台外側まで淡緑色釉が厚く施されている。高台内は一部に釉薬が垂れているものの、本来施釉されておらず、削り出しの跡がそのままみられる。

18は須恵質の甕形土器で、外器面に格子タタキが残り、内器面はナデによる調整がなされる。19はやはり須



①－a 層　褐灰(10YR4/1)
砂質土層(砂6:4粘)。層の上面に黄色粒子(径1mm～2mm)が混じる。

①－b 層　褐灰(10YR4/1)
①－a 層に比べ、土色が全体的にやや薄い。
暗灰黄(2.5YR5/2)

②－a 層　砂質土層(砂6:4粘)。
全体に黄色粒子が少量混じる。
暗灰黄(2.5YR5/2)

②－b 層　②－a 層に比べて粘性が強い。
にぶい黄褐(10YR5/3)

③層　砂質土と粘質土の混合土層(砂6:4粘)。

④層　黒褐(2.5YR3/2)
砂質土層(砂7:3粘)。
小礫(径5mm前後)を含む。

⑤層　灰オリーヴ(5Y5/2)
砂質土層(砂7:3粘)。黄色粒子を多く含む。

⑥－a 層　暗灰黄(2.5Y4/2)
砂質土層(砂6:4粘)。

⑥－b 層　暗灰黄(2.5Y5/2)
⑥－a 層に比べ土色がやや薄い。

⑦層　砂質土層(砂6:4粘)。
黒褐(10YR3/2)
砂質土層(砂6:4粘)。

第12図　Ⅲ－ｂ区　16号溝土層断面実測図

恵質の擂鉢で、器壁は薄く、内器面に７本歯の櫛状工具によるすり目がある。また外器面には布状の圧痕がみられ、この土器を作る際に形嵌めがなされた可能性がある。

20は陶器で、器形は小型壺と考える。外器面の胴張り部上位にはボタン状の花文が等間隔に配置される。口唇部から下位には褐釉がかけられている。内器面は無釉である。胎土は肌理の細かい精製土である。時期的には近世以降と考える。

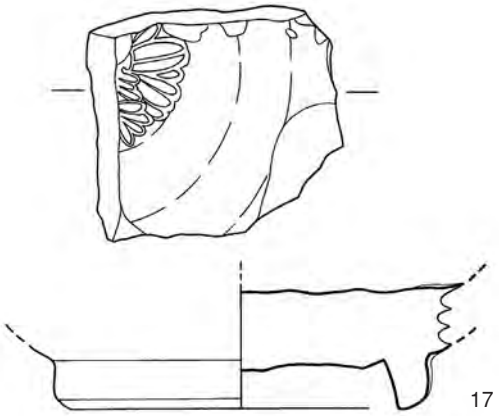
21は白磁質の戸車である。滑車部分には透明釉がかけられるが、使用による摩耗のため明確ではなくなっている。両側面は無釉で、砂粒が付着している。この遺物は主に19世紀前半のものと考える。

（３）17号溝

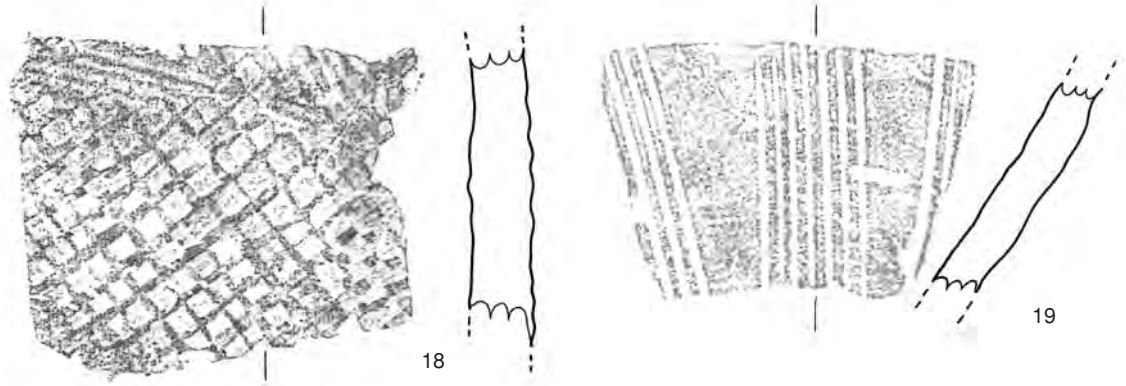
Ⅲ－ｂ区で検出した遺構である。最大幅が約２ｍ、確認した長さが約３ｍを測る。調査区内だけでは溝とするには難があるが、調査Ⅰ区に８号溝があり、この遺構と関係し、繋がるものである可能性が高い。しかし、確実に繋がるものとはいえないため、この８号溝との関係から一応溝遺構とした。

土層観察によって、この遺構は16号溝に先行する遺構であることは分かっている。この遺構の埋土は⑤層・⑥層であろう。さらに⑦層のことを考えると、さらに遺構が分かれる可能性が高い。

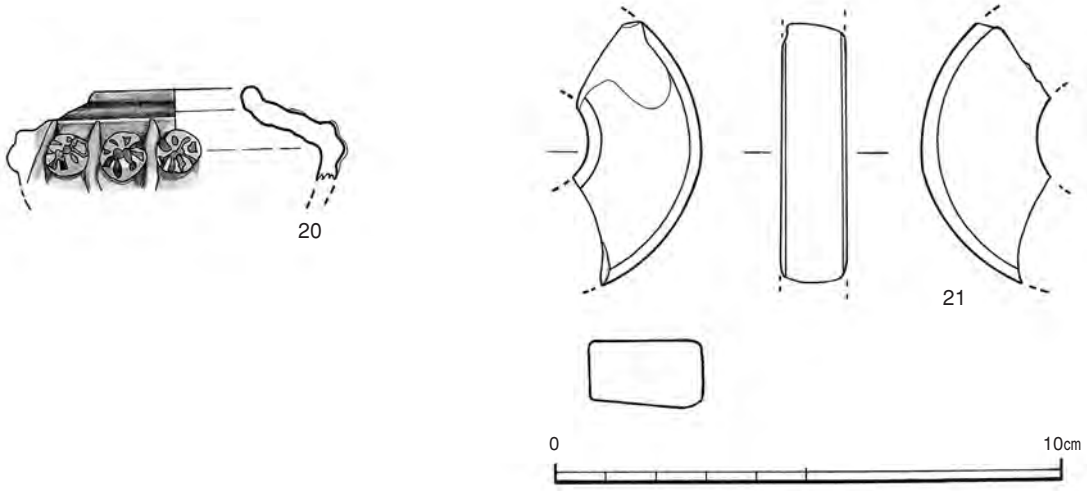
出土遺物については、先に記した16号溝を明確に分離しないうちに掘り下げていたため、その16号の出土遺物としたものの中に含まれている可能性がある。



遺物番号	種別	器種	遺構	底径	色調		備考	写真図版
					胎土	釉薬・染付		
17	青磁	碗	16号溝	(6.4㎝)	にぶい赤褐 2.5YR5/3	すずかけの樹の色 C−216		9



遺物番号	種別	器種	遺構	調整		備考	写真図版
				外器面	内器面		
18	須恵質土器	甕	16号溝	格子タタキとナデ	ハケの後ナデ		7
19	須恵質土器	擂鉢	16号溝	布状痕	7本櫛状工具によるスリ目		9



遺物番号	種別	器種	遺構	法量			色調		備考	写真図版
				口径	底径	器高	胎土	釉薬・染付		
20	陶器	小壺	16号溝	(3.2㎝)			にぶい黄橙 10YR7/3	鹿皮の茶 C−96		9
21	磁器	戸車	16号溝	(6㎝)	(1.4㎝)	(1.4㎝)		亜鉛華の白 C−164		9

第13図　Ⅲ−ｂ区　16号溝出土遺物実測図

（４）18号溝

Ⅲ−ｂ区北側隅で検出した遺構である。隅にかかっているため、確実な形態は不明である。確認できた範囲で形態をみると、底部幅が約40㎝、確認した長さが1.2ｍ、確認面からの深さが10㎝ほどを測る。出土遺物はほとんどなかった。

（５）19号溝

Ⅲ−ｂ区で検出した遺構である。18号溝に近接するものである。底部幅は10〜60㎝までと東側でより広がる。上部幅は60〜90㎝とかなり不規則な広がりを示す。最終的に確認した長さは1.05ｍを測る。ただ、完掘した状況であるため、18号溝との関係を捉えていなかったので、本来の長さを確認できていない。

出土遺物はほとんどなく、埋土の色調から中世以降のものと考える。

（６）20号溝

Ⅲ−ｂ区で検出した遺構である。この遺構は壁際の土層状況から21号溝を切っていると判断できる。確認している長さが2.8ｍ、幅が50〜95㎝、確認面からの深さが6〜15㎝を測る。埋土は暗褐色土で中世以降のものである。

（７）21号溝

Ⅲ−ｂ区で検出した遺構である。20号に切られている。幅は45〜65㎝、確認できた長さが1.2ｍ、確認面からの深さが15㎝ほどを測る。埋土は同じく暗褐色土で中世以降のものである。出土遺物はほとんどない。

（８）22号溝

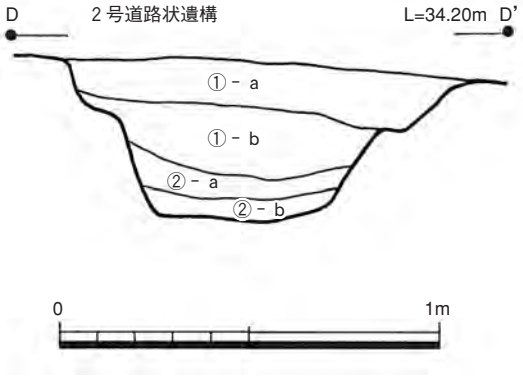
Ⅲ−ａ区で検出した遺構である。Ⅲ−ａ区の南側で検出したものであるが、明確に溝跡であるのかは不明である。拡幅トレンチの土層断面から確認したところでは、最下層は標高33.1ｍほどで確認面からの深さは90㎝ほどを測る。調査区の東側から南側までの確認した長さは、約10ｍほどである。埋土は暗褐色土で、中世以降のものである。遺物は出土位置を正確に記録していないので、拡張トレンチに含まれている可能性があるが全体としては少ない。

４　道路状遺構

（１）２号道路状遺構

この遺構は、Ⅲ−ａ区で検出した２号道路状遺構である。この遺構は４号堀と切り合い関係にあり、表土剥ぎに際し、４号堀の上位にこの遺構が横切るようにあったのを確認していたが、４号堀をはっきりさせようとして掘削を深くしたため、堀の上にあったこの遺構をとばしてしまった。この道路状遺構は表土剥ぎ時とその後の掘削による調査によって、ａ区西側部分のＨ−６グリッドの北側から南側に延び、ａ区南側で東側へ屈曲し、ほぼａ区の南側壁に沿って東側へと延びていた。このことからこの遺構は現在の画地に沿ったものとなっていることが分かる。また、先に記述したように４号堀よりも上位にあったこと、４号堀埋土の上位にはすでに近世初期の遺物が混入していること等から、より現在に近い時期の道路跡であろうと推定できる。

この遺構に設定した土層断面から、埋土は大きく２層に分けられ、さらに①層はａ・ｂ・ｃの３層に、②層はａ・ｂの２層に細分できた。①−ｃ層、②−ｂ層が硬化していることから大きくは２時期に分かれる。この埋土の堆積状況からこの遺構の形成過程をみると、②層下位部分では幅60㎝ほどが当初の掘削であったが、②層によって完全に埋没した時点で、幅80㎝ほどに拡幅されているようである。埋土自体はほとんど同一の黒褐色



２号道路状遺構

①-a.b.c層　a.b.c共に黒褐(7.5YR2/3)
a.b.cの違いはaがやや硬くしまる。
bとcの境のc直下付近がやや硬くしまる。

②-a層　黒褐(7.5YR2/2)
硬くしまった層で、特に上方の①-c層との境付近で特に硬くしまる。全体に黄色粒子(径0.5㎜～1㎜)を含む。

②-b層　黒褐(10YR2/3)
②-a層に比べてさらに硬くしまるが、同じ黄色粒子を含む。

第14図　Ⅲ－ａ区　２号道路状遺構土層断面実測図

を呈するもので、時期差はさほどないものと推定する。

先に記したように、遺構から出土した遺物が必ずしも遺構の時期を示すものではないが、出土遺物には縄文時代から近世に至るものまであることから、この遺構が近世以降のものである可能性が高い。

次に、その遺構の埋土中及び硬化面下から出土した遺物について記す。

22は土師質の皿である。外底面に糸切り痕が残る。胎土は良く精製され、焼成は良好である。器面調整の残りもよく見え、この遺物がかなり新しいものであることを示している。少なくとも近世以降であろう。

23は、須恵質の擂鉢である。器壁は厚く器種の大きさを想定させる。内器面には櫛目状工具によるすり目が見られる。胎土に細砂粒がかなり混じる。

24は、土師器の坏である。焼成は良好で、器形や焼成から古代のものである可能性が高い。

25は、須恵質の甕形土器の肩部である。外器面には格子タタキ痕が残り、内器面には横ナデ調整が施される。在地窯産で、中世のものである。

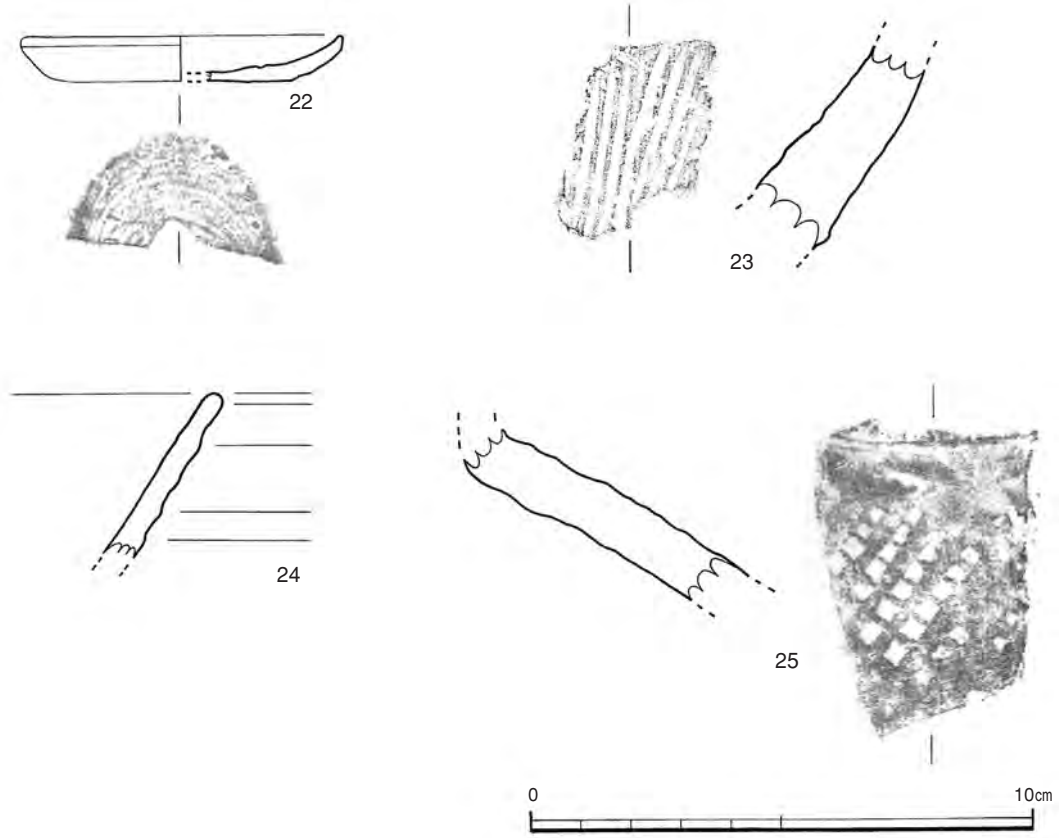
26は陶器の甕である。胎土は精製され、焼成は良好である。口唇部がやや上に膨らむ断面丁字形を呈し、その特徴から近世のもので、17世紀後半頃のものと考える。

27は安山岩製の打製石器で、刃部と考えられる側片に残る使用痕や調整痕から掻器的な使い方がなされた剥片石器と考える。この石器は縄文時代のものであろう。

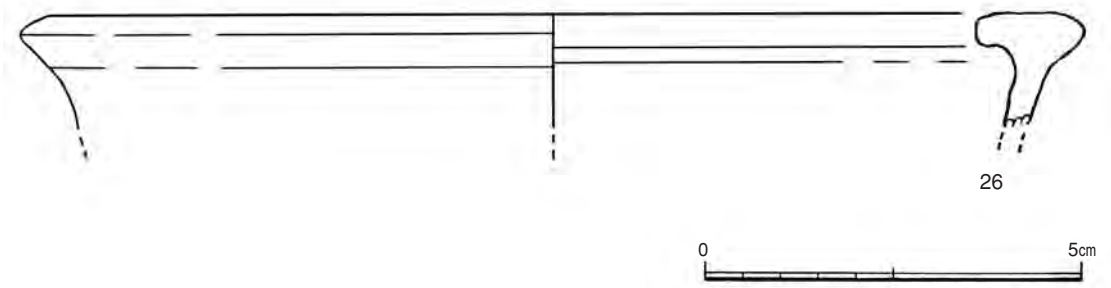
５　土坑

（１）12号土坑

Ⅲ－ａ区、Ⅰ－７グリッドで検出した遺構である。やや楕円形を呈する平面形の掘り込みで、長径が約95㎝、短径が約80㎝、確認面からの深さが約10㎝を測る。全体に浅い遺構である。埋土は暗褐色土で、出土遺物はなかった。そのため、時期は不明である。埋土の色から中世以降のものと考えられる。また、遺構の性格も不明である。

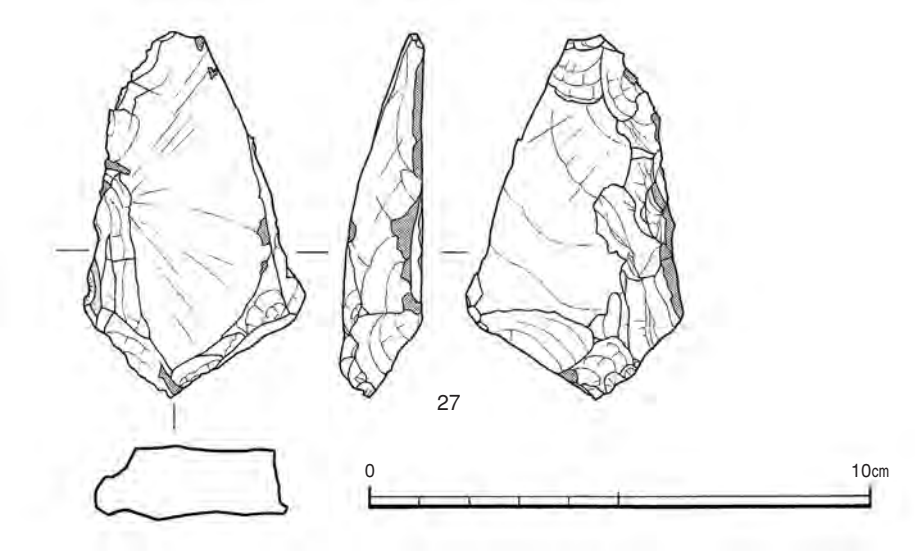


遺物番号	種別	器種	遺構	法量			調整		備考	写真図版
				器高	口径	底径	外器面	内器面		
22	土師質土器	Ⅲ	2号道路状遺構	(0.9㎝)	(6.4㎝)	(4.6㎝)	回転ナデ･糸切痕	回転ナデ		9
23	須恵質土器	擂鉢	2号道路状遺構	―	―	―	ナデ	櫛状工具による スリ目		11
24	土師器	杯	2号道路状遺構	―	―	―	ヨコナデ	ヨコナデ	内外に赤彩顔料	11
25	須恵質土器	甕	2号道路状遺構	―	―	―	格子タタキ後に ヨコナデ	ヨコナデ		11



遺物番号	種別	器種	遺構	法量	色調		備考	写真図版
				口径	胎土	釉薬･染付		
26	陶器	甕	2号道路状遺構	(28㎝)	にぶい赤褐 7.5R4/3	紫檀色 C−119		11

第15図　Ⅲ−ａ区　２号道路状遺構出土遺物実測図（１）



遺物番号	種別	遺構	法量				石材	備考	写真図版
			長さ	幅	厚さ	重量			
27	剥片石器	2号道路状遺構	7.2㎝	4.4㎝	1.4㎝	48.26ｇ	安山岩		11

第16図　Ⅲ－ａ区　２号道路状遺構出土遺物実測図（２）

（２）13号土坑

調査Ⅲ－ｂ区、G－７グリッドで検出した遺構である。平面形がやや南北に長い楕円形を呈し、長径が約65㎝、短径が約50㎝、確認面からの深さが約40㎝を測る。21号溝を精査中に検出したものであるが、両遺構の接する部分がごくわずかであるため、遺構同士の前後関係は不明確であった。この遺構から時期を示すような遺物の出土はなかった。ただ、底部には２つの石片があり、柱跡の礎石か、根締め石である可能性もある。しかし、周囲にはそれらしい遺構がないので、この遺構を柱跡とすべきか不明であるため、ここでは土坑とした。この遺構の時期については遺構埋土の色調から中世以降のものであると考える。

６　拡張トレンチ

前回調査した調査Ⅰ区との関係を見るため、Ⅲ－ａ区Ⅰ－７グリッドに南に向けて拡張トレンチを設けた。長さは３ｍほどで、一部が第一次調査のⅠ区と重なる。この部分でⅠ区との遺構の関係をつかむことができた。

また、先に記したように22号溝がこのトレンチにかかっており、⑥層がこの遺構の最下層の埋土と考える。⑦層については、22号溝よりも古い遺構の埋土と考え、Ⅰ区で確認した11号溝の埋土ととらえている。

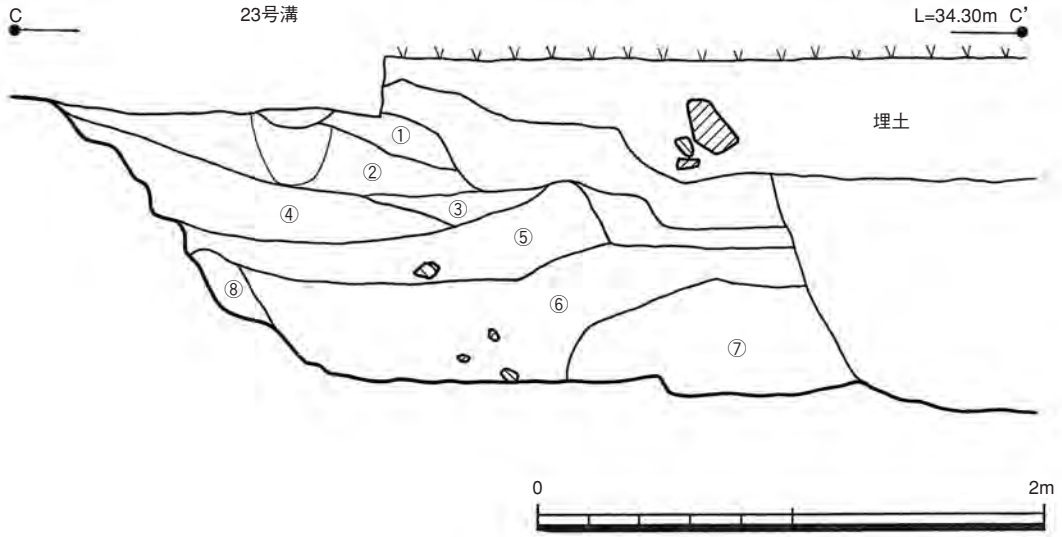
このトレンチには、22号溝や11号溝が一部かかるので、この遺構の遺物も含まれている可能性がある。しかし、出土遺物の位置や層位を十分記録していないため、どの遺構と関係するか不明である。そこで、トレンチから出土した遺物は、一括遺物としてここで記述する。

28は、須恵質の甕形土器の頸部から肩部付近の破片である。外器面には格子状のタタキが見られる。内器面には細かいハケ目によるナデ調整が施される。

29は、瓦質の鉢形土器の口縁部片である。口唇部がやや肥厚している。

30は、須恵質の擂鉢片である。焼きはややあまいが、良く締まる。内器面には７本櫛目状の工具によるスリ目が四箇所ほど見られる。外器面にはナデ調整が施される。

31は須恵器の大甕片である。外器面の須恵器には縦方向に平行に入るタタキ痕が見られる。また横方向のカキメも見られる。内器面には同心円当て具痕がある。焼成は良好である。



①.②.④層　褐(10YR4/4)
いずれの層もやや軟らかい。
①層は②層に比べややしまる。
②層と④層は同質・同色であるが、その境が若干しまる。

③層　褐(10YR4/4)
ややしまる。
②.④層に比べやや濃い色調。

⑤層　オリーヴ褐(2.5YR4/3)
ややしまる。

⑥層　暗灰黄(2.5Y4/2)
黄色粒子(径1mm前後)を極少量含む。
やや水分が多い。

⑦層　にぶい黄褐(10YR4/3)
黄色・赤色粒子を⑥層より多く含む。
やや水分を含む。

⑧層　灰黄褐(10YR4/2)
水分が多くしまっていない。
部分的にⅡ層が混じる。

第17図　Ⅲ－ａ区　22号溝土層断面実測図

32は土師器甕の口縁部片である。口唇端部が丸くなり肥厚し、頸部から大きく外反している。口縁内部には煤らしいものが付着している。

33は土師器の杯片である。横ナデ痕はみられるが、かなり摩耗が進み、口唇部の状況が不明確である。胎土はよく精製されている。

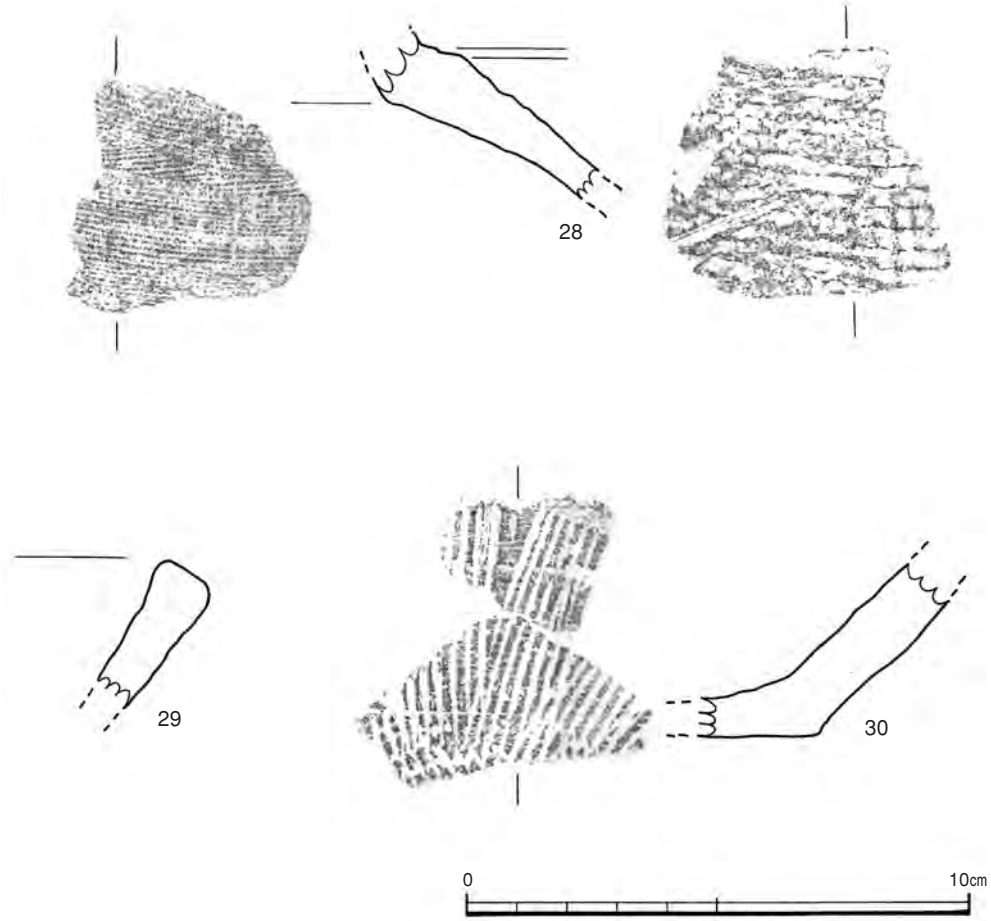
34は時期が不明確であるが、壺の口縁と考える。口唇部が短く屈曲する。焼成は良好でよくしまる。形態的に古墳時代の土師器の可能性がある。

35は白磁の小碗である。透明釉によるもので紋様を持たない。胎土は良く精製され、淡白色を呈する。器形的な特徴から近世の肥前系陶磁器と考える。36は磁器の底部片で、碗であろう。この部分だけでは白磁碗にみえるが、内器面の蛇の目釉剥ぎや高台内部にみえる点状の褐色釉から近世の磁器であると考える。白磁の碗である。

37は内外器面に染め付け磁器で、圏線が入る碗片である。染め付け色がやや緑気味の発色線がある。全体的な形態が不明であるが、近世肥前系のものである。

38は青磁の小型壺であろう。外器面は全体的に淡緑色の釉がかけられているが、畳付部分は釉剥ぎされている。無釉であるが、底面に灰が少し被っている。

39は染付の小型猪口である。外器面口縁部に、濃い藍色の雨降文が入る。形態的な特徴から17世紀末から18世紀初頭にかけてのものである。



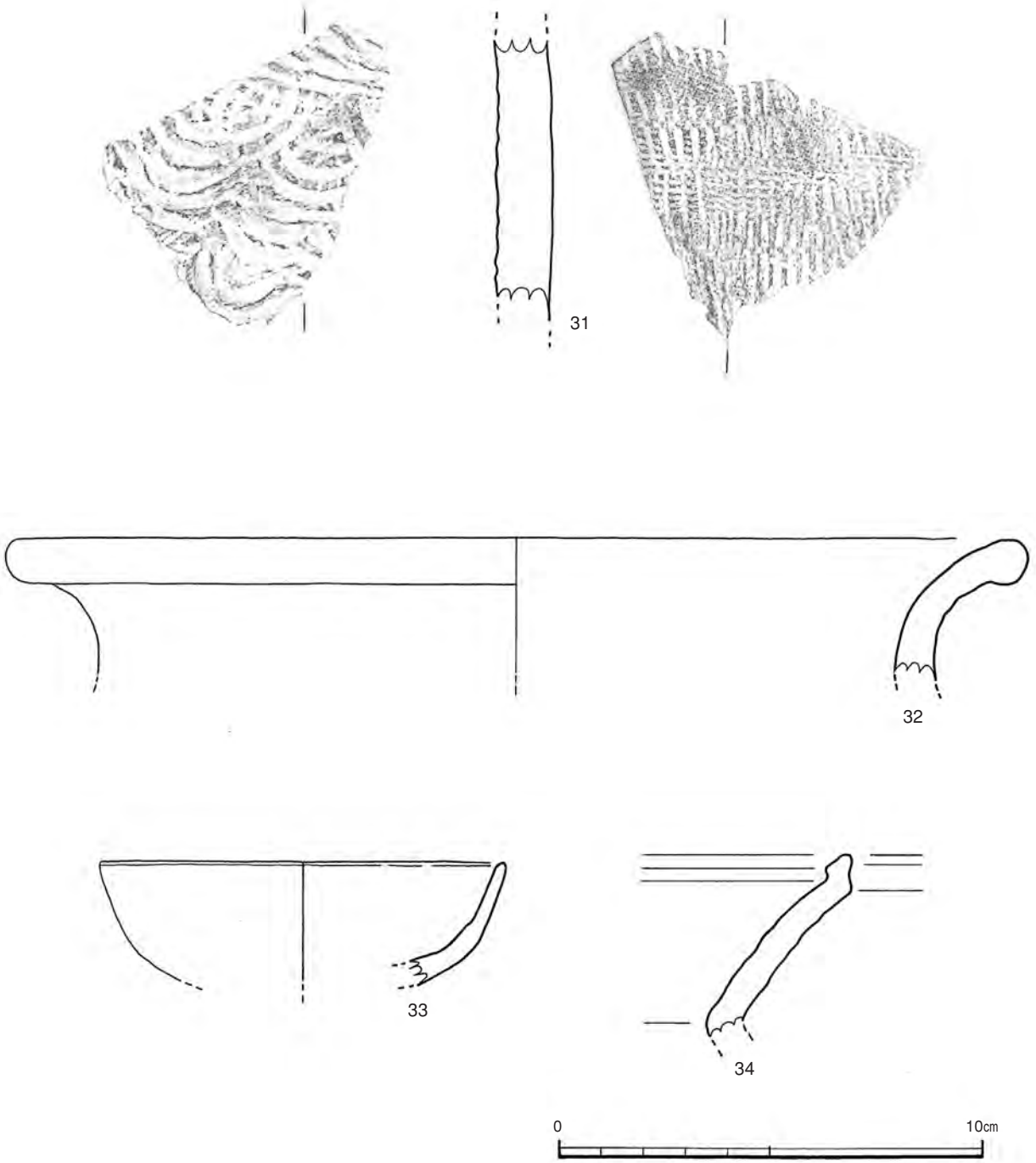
遺物番号	種別	器種	遺構	調整		備考	写真図版
				外器面	内器面		
28	須恵質土器	甕	拡張トレンチ	1.2㎝	刷毛目		10
29	瓦質土器	鉢	拡張トレンチ	ナデ･板状工具によるナデ	ナデ		10
30	須恵質土器	擂鉢	拡張トレンチ	ナデ	ナデ･7本櫛目状工具によるスリ目		10

第18図　Ⅲ−ａ区　拡張トレンチ出土遺物実測図（１）

40は染め付けの蓋付鉢の蓋である。器表面には袈裟襷文と斜格子状文が入る。時期的には18世紀以降のものであろう。

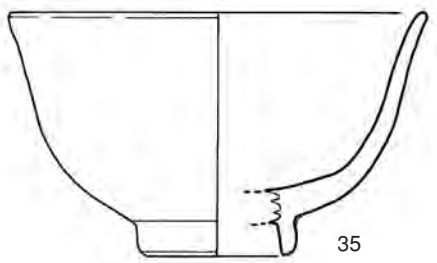
41は弾丸で、最大径が11.2㎜ほどを測り、50口径（0.50インチ＝12.7㎜）の機関銃のものと考える。先端部に歪みが見られるが、これは着地時に衝撃を受けたためと考えられる。胴部に一条のくびれが見られ、やや右斜めに走る８本のせん底痕がみられる。また、尾部はやや窄まり船底形となっている。この弾丸を発射するような演習場ではないこの場所でこの弾丸が出土したのは、太平洋戦争末期に飛来してきたＢ−29が機銃掃射を行った際に残ったものである可能性が高い。この近くには陸軍の施設があったので攻撃が行われたのであろう。

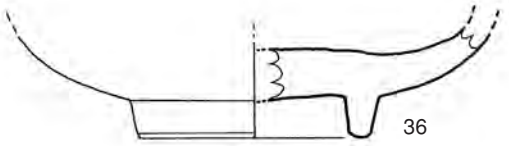
なお、弾丸については出土位置が不明確ながら、類似の形態と大きさのものを採集している。こちらは腐蝕がかなり進み、錆により細っているようであるが、形状はまだ留めており、形態的に類似していることがわかる。上記と同様のものであろう。

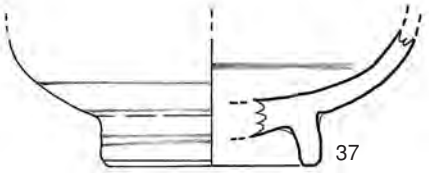


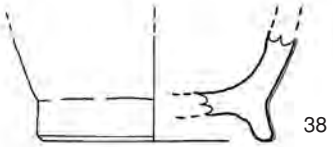
遺物番号	種別	器種	遺構	口径	調整		備考	写真図版
					外器面	内器面		
31	須恵器	大甕	拡張トレンチ	1.2㎝	平行タタキ	同心円文アテグ		10
32	土師器	甕	拡張トレンチ	(24㎝)	ヨコナデ･刷毛目	ヨコナデ		10
33	土師器	杯	拡張トレンチ	(9.5㎝)	ヨコナデ	ヨコナデ		10
34	土師器	壺	拡張トレンチ	―	ヨコナデ	ヨコナデ		10

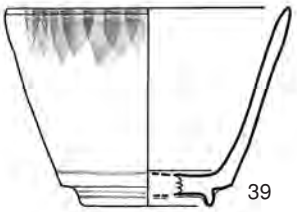
第19図　Ⅲ−ａ区　拡張トレンチ出土遺物実測図（２）

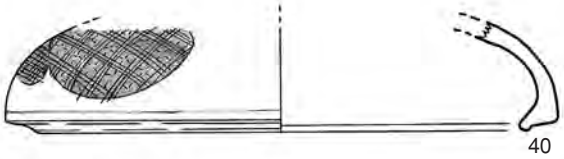


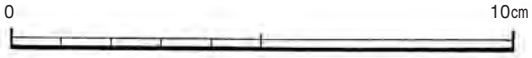






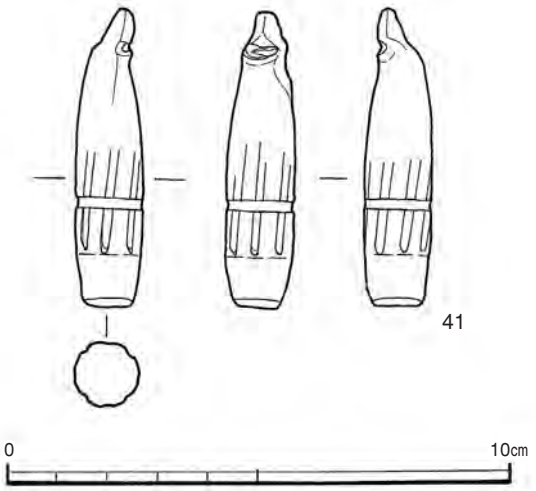






遺物番号	種別	器種	遺構	法量			色調		備考	写真図版
				口径	底径	器高	胎土	釉薬・染付		
35	白磁	小碗	拡張トレンチ	1.2㎝	(2.8㎝)	4.8㎝	灰白 N8/1	鉛の灰色 C−211		10
36	磁器	碗	拡張トレンチ	(4.6㎝)	―	―	灰白 N8/1	雪の灰色 C−282		10
37	染付	碗	拡張トレンチ	(4.2㎝)	―	―	灰白 N8/1	雪の灰色C−282 ｻｯｸｽﾌﾞﾙｰ C−249		10
38	青磁	小型壺	拡張トレンチ	(4.4㎝)	―	―	灰白 2.5Y8/2	淡い灰緑 C−194		10
39	染付	小型猪口	拡張トレンチ	(5.7㎝)	(2.6㎝)	3.9㎝	灰白 N8/1	雪の灰色C−282 濃い灰藍C−257		10
40	染付	蓋	拡張トレンチ	(9.6㎝)	―	―	灰白 N8/1	あひるの卵の薄青 C−204		10

第20図　Ⅲ−ａ区　拡張トレンチ出土遺物実測図（３）



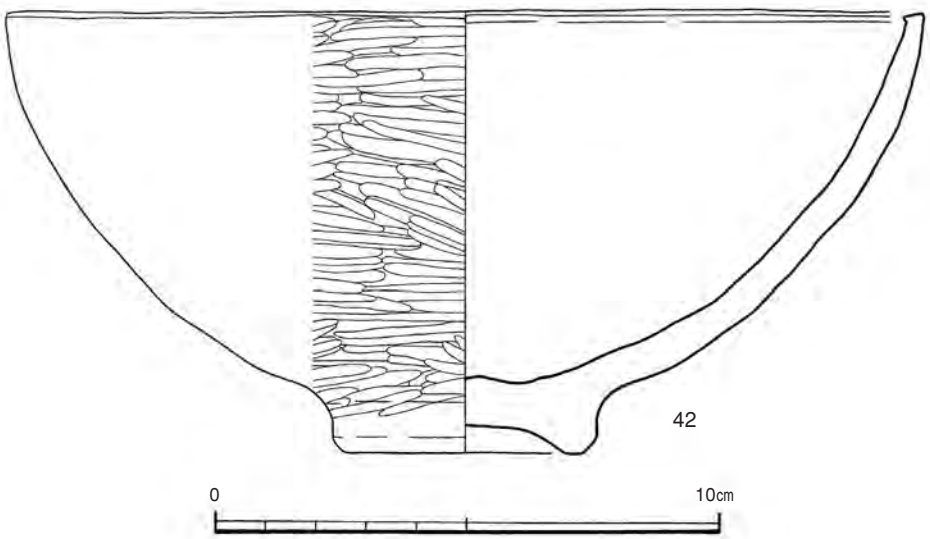
遺物番号	種類	遺構	法量			備考	写真図版
			長さ	最大径	重量		
41	機関銃のタマ	拡張トレンチ	5.8㎝	1.27㎝	40.76ｇ	表面に緑青や灰白色錆が発生している	12

第21図　Ⅲ－ａ区　拡張トレンチ出土遺物実測図（４）

７　調査Ⅲ区出土遺物

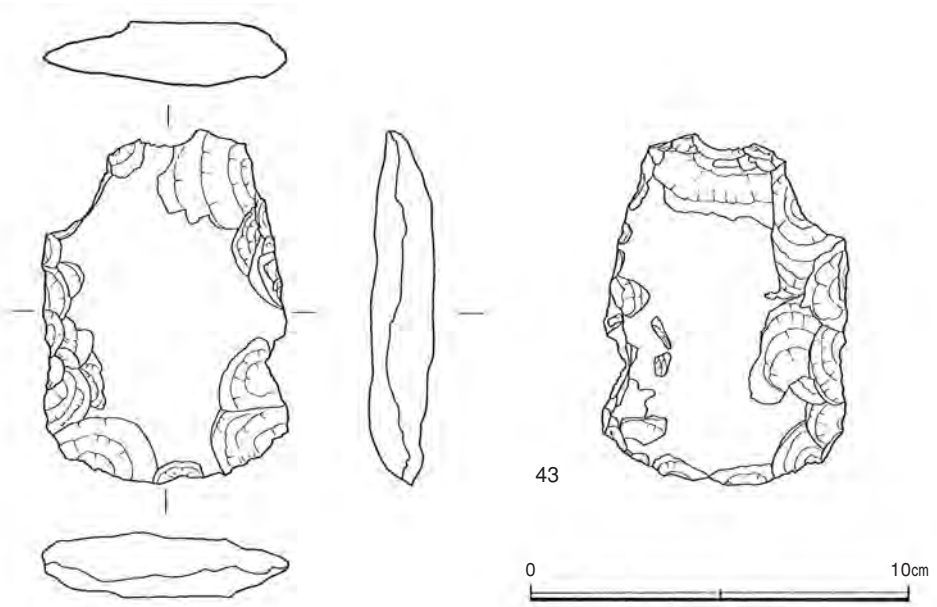
42・43はⅢ－ａ区、44は出土区が明確ではない。

42は、Ⅰ－７グリッドで、２号道路状遺構の近くで出土した縄文土器である。道路状遺構の縁近くから出土し、この遺構に伴うようにみえたが、明らかに地山の中から出土している。しかし、明確な土坑などの遺構は確認できなかった。器形は底部に脚状の部分を持つ鉢形を呈し、外器面には主に横方向の丁寧なミガキ調整が施される。



遺物番号	種別	器種	遺構	法量			調整		備考	写真図版
				器高	口径	底径	外器面	内器面		
42	縄文	浅鉢	―	(8.7㎝)	(18㎝)	(4.6㎝)	ミガキ	ミガキ		11

第22図　Ⅲ－ａ区　出土遺物実測図（１）



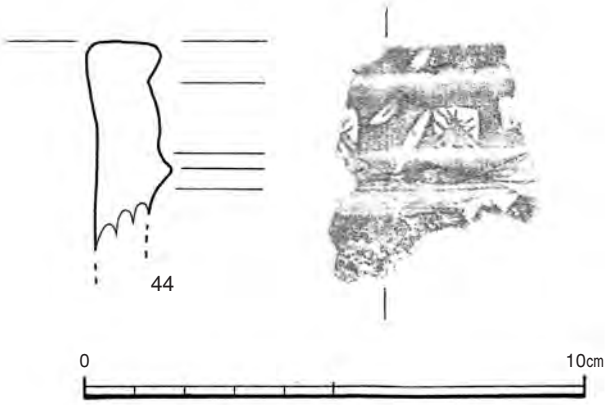
遺物番号	種別	遺構	法量				石材	備考	写真図版
			長さ	幅	厚さ	重量			
43	打製石斧	―	9.3㎝	6.4㎝	1.7㎝	140.26ｇ	安山岩		12

第23図　Ⅲ－ａ区　出土遺物実測図（２）

内器面にも調整が施されているようであるが、明確にはみえない。口唇頂部は平坦になでられ、上部内側が弱く抉れたようになっている。底部は５㎝ほどの低い脚状を呈し、上げ底となっているため高台のようにもみえる。胎土は細かい砂粒を多く含むもののかなり精製され、焼成も良好である。時期的には縄文時代後期～晩期初頭のものであろうか。

43は、打製石斧である。出土位置が明確でなく、イモ穴から出土したと考える。石材は安山岩で、最大幅が6.4㎝、最大長が9.3㎝を測る。刃部から頂部まで欠損していないとすると、かなり全長の短いものである。側面、刃部、頂部にそれぞれ剥離痕があり、敲打によって調整されている。使用痕は明確ではない。

44は、瓦質の火鉢である。口縁部付近のみで、突帯の間に四角に菊花文のスタンプが押されている。調整はナデによる。



遺物番号	区	種別	器種	遺構	調整		備考	写真図版
					外器面	内器面		
44	一括	瓦質土器	火鉢	不明	ヨコナデ	ヨコナデ･スタンプ		12

第24図　Ⅲ区　出土遺物実測図

第Ⅲ章　まとめ

第１節　調査Ⅲ区のまとめ

今回調査したⅢ区は、前回調査したⅠ・Ⅱ区に比べ調査面積が狭く、遺構数も少なかった。限られた範囲のため、遺構の全体像を掴めないものが多かった。その中で、得られた成果についてここでまとめる。

今回の調査地区は前回調査した地区のうちⅠ区と隣接している。そのⅠ区とⅢ−ａ区を地形的に比較すると、１ｍほどの比高差がある。Ⅰ区は調査前には水田としてⅡ区の道路面に当たる部分よりもさらに低くなっており、削平を受けていたことが前回の調査により確認されている。そのため、Ⅰ区の遺構はかなり削平を受けた状態での検出であり、Ⅲ−ａ区で検出した遺構の関係は、一箇所の拡張トレンチを設定して確認したものの、明確になったとは言い難い。ただ、そういう中でⅢ−ａ区の23号溝とⅠ区の５号溝には関連がありそうである。

また、４号堀は、Ⅱ区の１号堀と同じ性格のものと推定できる。４号堀は出土遺物をみると、中世から近世はじめにかけて長く溝状の落ち込みとしてあったらしく、埋土中に硬化面が形成されていることもあり、時として道路としての利用もあったようである。Ⅱ区の１号堀などとの関係をみると、１号堀がⅡ区の東端で北東方向に屈曲し、２号堀や３号堀と重なり、浅くなりながら北上するのに対し、４号堀は８ｍほどの間隔をおいてほぼ並行して北上していくことが分かる。この南側はⅠ区がすでに開削を受けて状況が分からないが、Ⅰ区の11号溝や13号溝に残された痕跡を基にして想定すると、４号溝が南側へずっと延びていた可能性を考えることができる。北側は調査区外で不明であるが、地籍図の区画線が丁度この４号溝に沿ったようにみえることからある程度北上していたと想定できる。

一方、Ⅲ−ｂ区は道路建設に伴い削平を受けているものの溝跡がいくつも残り、Ⅱ区の南側の道路状遺構や溝遺構の検出された状況に近い。ただ、Ⅱ区との関連する遺構は不明である。一方で、Ⅲ−ｂ区の18号溝とⅠ区の８号溝、Ⅲ−ｂ区の16号溝とⅠ区の10号溝がそれぞれ連続する可能性が高いようであるが、確証までは得られてはいない。

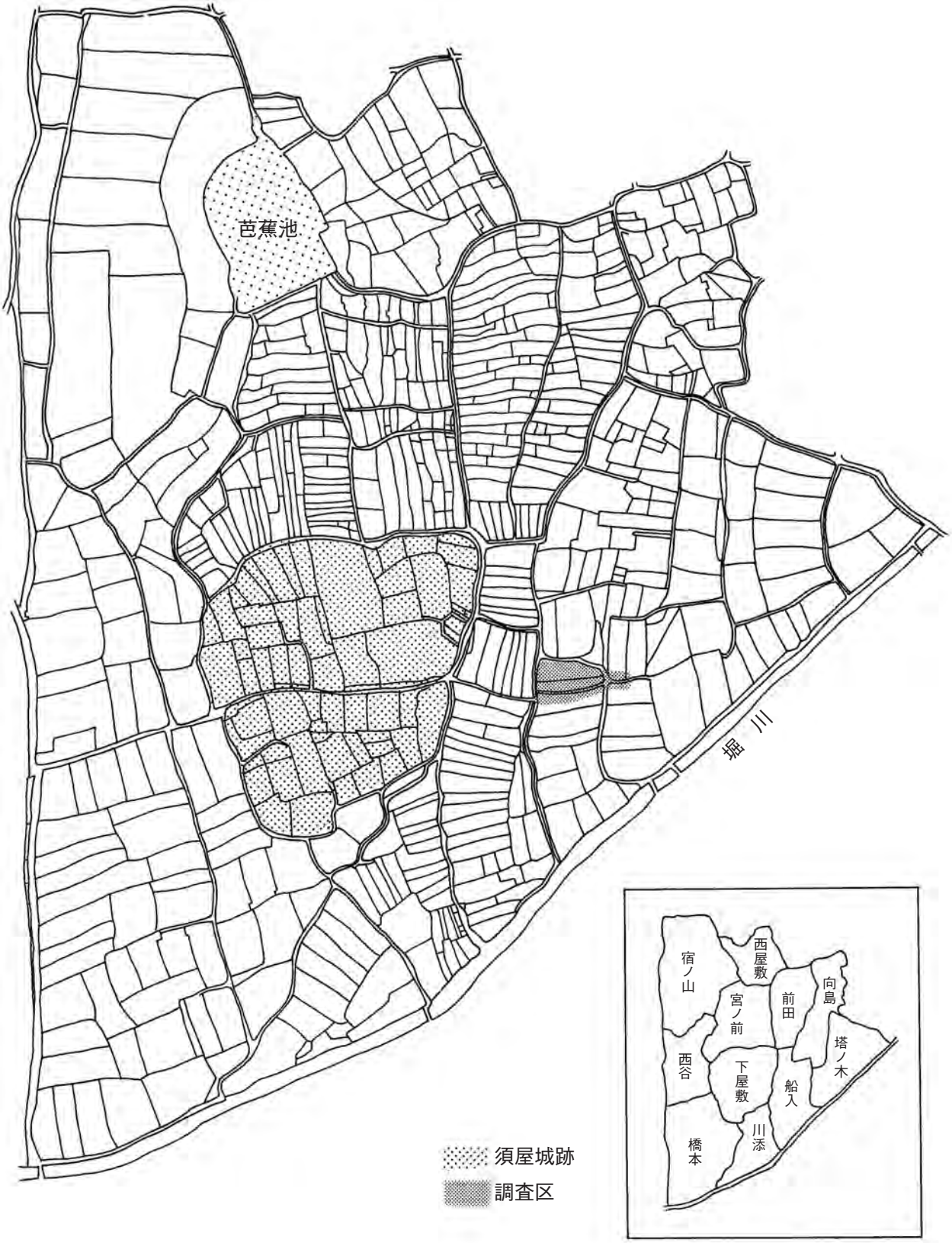
その他、溝遺構については前回の調査でも道路状遺構に関係して検出した小溝に近いものが多かった。それぞれの遺構は時期の確定は十分ではないが、埋土の色調などから中世から近世にかけてのものと考える。

次に、今回の調査で出土した遺物には、縄文時代、古代から近世までのものがあった。縄文時代の遺物は数量的には少ないが、縄文時代後期の浅鉢は、ほぼ全体を丁寧にミガキで仕上げたもので、大型の椀を思わせるものである。土坑などの遺構を確認するには至っていない。他に石器として打製石斧がある。また、須屋城跡では縄文時代早期の押型文土器や後晩期の土器が多く出土している。さらに須屋城跡では、他に弥生時代の遺構と遺物も検出されている。船入遺跡では、縄文時代や弥生時代を包含するような層は削平を受けたためかほとんどなく、遺物の出土はたまたま包含層の一部が窪地などに残されていたためと考えられる。精査しても遺構としては確認できなかったので、須屋城跡以外にもこの周辺に良好な縄文時代の遺構が存在する可能性を指摘するに留める。

また、機関銃の弾丸が、この調査区の近代以降の層に混入していた。これは太平洋戦争末期に本土空襲に際し、発射されたものと推定した。弾丸の規格から米軍の本土空襲に当たって使用されたＢ−２９搭載の機関銃のものと判断したことによる。この遺跡の近くに当時陸軍関係の施設があったことによるものか、単に熊本市空襲の際、ついでに発射されたものか分からないが、戦争に伴う遺物として敢えて本書で取り上げた。

最後に、調査範囲での遺構数の少なさと出土遺物の数量のあり方は、この地の土地利用方法と関係するのかもしれない。

第25図　周辺地形図



第26図　周辺地籍図

第２節　船入遺跡と須屋城跡

船入遺跡は、須屋城跡に隣接した遺跡である。船入遺跡の前回の調査では掘立柱建物跡を2棟検出し、それを取り囲む大規模な堀を確認した。そして、それら全体を14世紀中葉から15世紀中葉を主とする居館跡と想定した。地籍図や周辺地形の調査からⅡ区の堀の囲まれた居館跡の推定範囲は、南北を長辺とする方形区画とした。その規模は、南北の長辺が約97.0m、東西の短辺が約57.0mを測り、北東部分のコーナーのみが直線的な形状をとるものとした。今回調査したのはこの長方形区画の東側に隣接した部分になる。当初の調査目的では町道下で１号堀などの延長線をとらえる予定であったが、調査条件からその目的は達成できなかった。逆に新たに４号堀を確認したために遺跡の広がりを考える必要がでてきた。さらに今回調査した保育園北東側の竹林中に、地域の方の話では古くは寺跡であると言われる場所があり、踏査すると、いくつかの高まりと、そこに寄せたように15世紀頃の空風輪等が確認できた。寺跡といえば、旧芭蕉池の跡地は妙泉寺跡という。涌水地があったらしく後に堤とされていた。この寺跡についての情報も乏しく、先の石塔群との関わりも考えることもできそうである。

近年周囲の宅地化が進み、ずいぶん土地の改変が進んできているが、幸いまだこの調査地の周囲は明治期の地籍図と比較しても当時の地籍をかなり残していることが分かる。この図をもとに現地で詳細な分布調査を行えば、遺跡の広がりを掴むことができると考える。

次に船入遺跡と須屋城跡との関係をその地籍図をもとに見ると、間に細い短冊状の土地区画が認められる。前回の調査開始前にこの部分についても須屋城跡の範囲に含まれているため、確認調査を行っている。この場所は地形的に一段低くなり、水田となっているところで、長いトレンチを２本掘削した。その結果、そこでは層序的には礫混じりのローム層まで削平されていることが分かったが、西側の須屋城跡に近い場所で流路らしい幅５ｍほどの溝状の落ち込みを確認した。そこからは多量の縄文土器、弥生土器等が混在した状態で出土し、落ち込み自体の輪郭が不明瞭であったので人工的な掘り込みではなく、流水による自然攪乱による落ち込みと判断し調査範囲からはずした。しかし、この部分が何時の頃から現在のような状態になったかを知るうえでは調査すべきであったのかもしれない。そうすれば、船入遺跡と須屋城跡の関係を掴めた可能性がある。遺跡名となった「船入」という小字は明治期のものであるようで、「正徳名寄帳」では「ほり田・ほり田ひかし・下ほり田・天神ノまへ・天神めん」、さらに「慶長十三年検地帳」では「ほり田」となっており、堀があった可能性が高く、この低地部分を指すものである可能性が高い。すなわち、先に自然流路と考えた部分が実は人工的な堀で、そこに浅い船などを進入させることができ、水上運搬に利用することができたので字名として最終的に明治期に「船入」としてまとめて字となったという想定もできる。このことは、問題の落ち込み部分について今回調査をしなかったのであくまでも想定に過ぎないので、今後の調査に期待したい。

現在、須屋城跡の範囲は下屋敷を中心とした一帯を想定されている。文献的には情報が少ないが、菊池氏の寄合衆の一員として須屋氏の名が文献中に出てくるので、この須屋に須屋氏の一族が居住地とするのが妥当であろう。今後、さらに須屋城跡の調査成果を加え、船入遺跡も含めた広い範囲を須屋城跡とその関連遺跡として一括すべきであろうと考える。

写 真 図 版

図版１

Ⅲ－ａ区　４号堀検出状況　（東北東→西南西）

Ⅲ－ａ区　４号堀完掘状況（南西→北東）

図版２

Ⅲ－ａ区　４号堀土層断面（西南→北東）

Ⅲ－ａ区　２号道路状遺構
検出状況（東南→北西）

図版３

Ⅲ－ａ区　２号道路状遺構土層断面

Ⅲ－ａ区　完掘状況（東→西）

図版４

Ⅲ－ａ区　完掘状況（西→東）

Ⅲ－ｂ区　完掘状況（南西→北東）

図版５

Ⅲ－ｂ区　完掘状況（北東→南西）

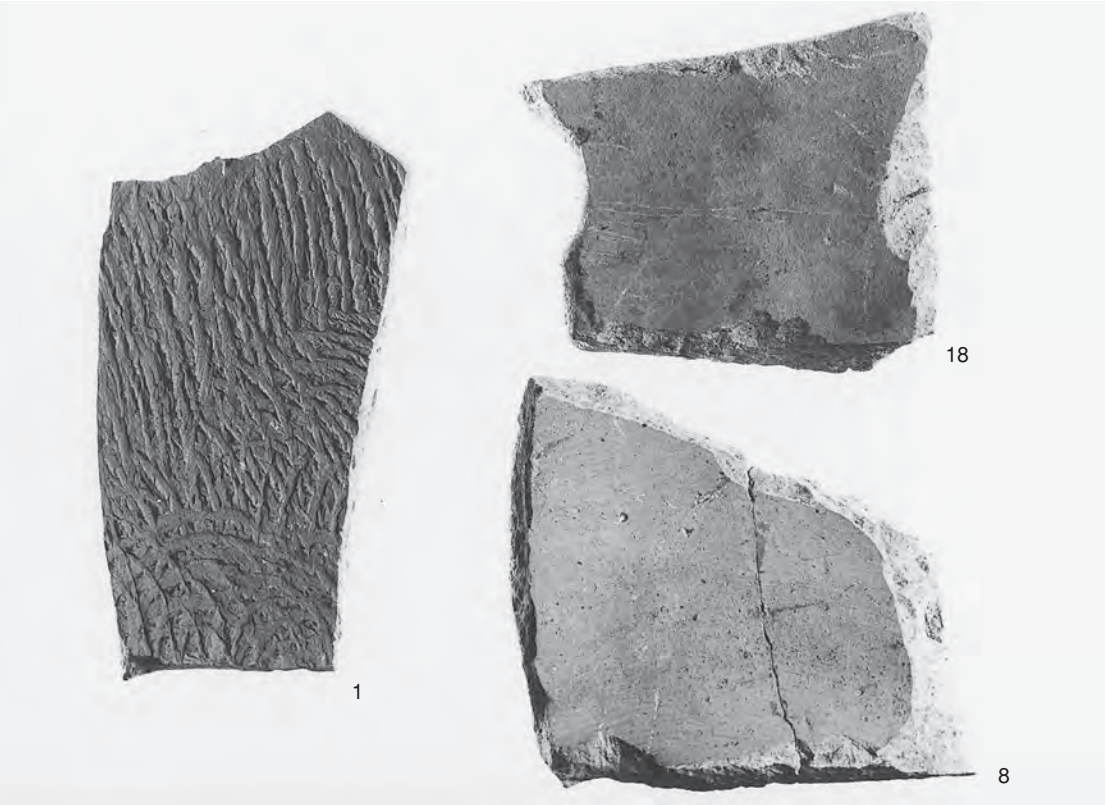
Ⅲ－ｂ区　完掘状況（南西→北東）

図版６

Ⅲ－ｂ区　20・21号溝完掘状況（西南→北東）

Ⅲ－ｂ区　13号土坑（北東→南西）

図版７



Ⅲ－ａ区　出土遺物

図版８

Ⅲ－ａ区　出土遺物

図版９

Ⅲ－ａ区　出土遺物

Ⅲ－ｂ区　出土遺物

図版10

拡張トレンチ　出土遺物

図版11

Ⅲ－ａ区　２号道路状遺構出土遺物

Ⅲ－ａ区　出土遺物

図版12

Ⅲ－ａ区　出土遺物

報告書抄録

フリガナ	フナイリイセキニ
書名	船入遺跡Ⅱ
副書名	一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告　第２３８集
編著者	坂田和弘
編集機関	熊本県教育庁文化課
所在地	〒862－8609　熊本県熊本市水前寺６丁目１８番１号
発行年	２００６年

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
フナイリイセキ 船入遺跡	コウシシキュウ 合志市（旧 ニシゴウシマチ 西合志町） スヤアザトウ 須屋字塔 ノキ ノ木	43407	066	32° 51′ 15″	130° 43′ 57″	2005.6.7 ～ 2005.7.26	375 ㎡	一般国道３号熊本北バイパス改築事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふないりいせき 船入遺跡	館跡	縄文 中世 近世	大溝遺構 道路状遺構 溝 土坑	縄文土器・石器 土師器・土師質土器 須恵器・須恵質土器 瓦器・瓦質土器 陶磁器	

熊本県文化財調査報告　第238集

船　入　遺　跡　Ⅱ

発行年月日　　平成19年３月31日

編　集
発　行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺６丁目18番１号

印　刷
製　本　株式会社　ト　ラ　イ
〒861-0104　熊本県鹿本郡植木町味取373-1

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 238 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：船入遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/